はじめに

本報告書は令和 2 年度、青森学術文化振興財団助成金事業『青森県の人口減少対策としての「特定技能」外国人人材について～ベトナム人の人材を中心に～』の成果報告書である。この事業目的は、青森県内の主要産業における人手不足解消のために、外国人人材に注目してその現状と課題を把握するものである。人口減少対策としての外国人労働者の動員は、すでに全国的な広がりを見せており、特に地方地域での深刻な人手不足を補う役割を担いはじめている。特に近年ではベトナム人の技能実習生が多く来日し、労働力の担い手となっている。

青森県においてもここ 10 年で本格的に技能実習生を受け入れることになった。中でも、第一次産業は青森県にとって生命線ともいえる中心産業であり、その人手不足、後継者不足の解消のための外国人人材に注目が集まっている。またそういった豊富な資源を加工するための工場労働者不足を補うため、積極的に外国人人材を雇い入れる傾向が強くなっている。こういった状況を背景に、当初の予定では近年青森県でも増加傾向にあるベトナム人にのみ焦点をあて、ベトナム本国への調査も予定していた。しかしながら新型コロナの影響で県内の調査のみに絞ることとなった。またそのため県内調査では、ベトナム人の動向を中心に、外国人人材／外国籍市民全般に焦点をあてることとなった。具体的には受け入れ企業側、国際的な活動をしている企業、さらには日本ですでに永住を決めている人への聞き取りを行った。調査に関しては zoom での聞き取りも含め、7 団体、および 3 人から聞き取りを行った。本報告書は、今回聞き取りを行った内容を紹介するものである。いわゆる現場の声を紹介する、一次資料として見て頂ければ幸いである。

本調査は継続的に行っているため、学術的な成果は今後まとめていく予定であるが、今回の調査で三つの知見を得ることができた。第一にこれまでの「技能実習」制度が当分の間続く事である。「特定技能」の在留資格が出来たものの、送り出し国との関係上、これまでの「技能実習生」制度の枠組みは簡単には変更できないことがわかった。第二に県内においても、やはり「ベトナム人実習生」の来日が今後しばらくは中心になってくる事である。中国人の実習生に関しては、ピークアウトを迎え、今後ますます減ってくるであろう。さらにミャンマー、フィリピン、インドネシア、モンゴルからの人材が増加する可能性がみえてきた。第三に青森県全体としては日本人の人口減少に反比例して、外国人人口は増加している事である。そのため、今後外国人人材は県内で増加していくのは間違いない。このことから、青森県内における本格的な多文化共生の議論の必要性が伺えた。課題としては新型コロナの問題で調査が設定できなかった、第一次産業の担い手、また工場労働の担い手への調査が必要といえる。もちろん可能であれば送り出し国の現状をしっかりと調査すべきであろう。これらの課題を次年度以降も継続的に調査研究していく予定である。

なお本調査は青森公立大学地域みらい学科演習科目「知の挑戦Ⅰ」「フィールドリサーチⅠ」の活動を兼ねている。特に講義などで学ぶこととは違った、現場の方々の声を直接聞くことは学生にとって、大きな財産となったといえる。また報告書を作成するにあたり、それぞれの学生が担当を決め、聞き取りデータを文字化した。それを佐々木が校正し、話を伺った皆様に最終チェックをおこなってもらった。本報告書はそういったプロセスを得て完成したものである。

最後になったが、今回新型コロナの流行にも関わらず、多くの方に調査協力をいただいた。お忙しい中、ご対応頂いた皆様にこの場をもって心より感謝を申し上げたい。ありがとうございました。本調査研究を次年度以降も継続的に行い、青森県における課題が少しでも解決に向かうよう努力していきたい。

2021 年 3 月 1 日

青森公立大学　経営経済学部　地域みらい学科
教授　佐々木てる

目次

第Ⅰ部　受け入れ団体の現状

1　北日本造船・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・**1**

2　みちのく中小企業組合 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・**11**

3　特別養護老人ホームみちのく荘 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・**18**

第Ⅱ部　行政の取り組み

4　八戸市役所 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・**29**

5　三沢市国際交流教育センター ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・**38**

第Ⅲ部　国際的な視点と外国籍市民

6　有限会社　アルパジョン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・**44**

7　八戸市　インドカレー　**UTSAV**（ウサブ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・**53**

8　フィリピン人　永住者　**E** さん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・**57**

9　フィリピン人　永住者　**A** さん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・**63**

1　北日本造船

調査概要

日時：2020 年 10 月 30 日（金）　18：00～19：00
場所：伊藤ヨーカドー、フードコート
話し手：北日本造船株式会社　髙橋信行
聞き手：佐々木てる　神なぎさ　亀岡紗衣　前川美穂香

会社データ

北日本造船 1800 人従業員、外国人 200 名程度
作業内容：溶接業
技能実習生　最大 250 名　現在 160 人程度
　2000 年前後より技能実習生を受け入れている。
　中国人が中心+インドネシア（2019 年 10 月～11 月に現場に入った）
　　中国人は大連から派遣（そろそろ中国から他国へ切替を検討したい）
　　インドネシアの人の問題点：宗教的な戒律（お祈り、ラマダン）
　　ベトナム人は足場をつくる作業員（別の管理団体から派遣）
　　中国人 30～40 歳台が多い。
　コロナ禍での問題　帰国させるのに飛行機代が高い　通常 5 万→25 万
　現在一回帰った人が「特定活動：造船就業者」として 3 年間の資格で来日。
　　→現場で活躍。

現在の実習生の数

佐々木：現在実習生の数はどの程度ですか。今年は新しい人は来ないと思いますが、5 年前にお話しを伺ったときから、昨年までで毎年増えていたのですか。
高橋：昨年がピークで、250 名いました。5 年前と比較するとかなり増えましたね。中国人が 250 名。インドネシア人は去年初めて受け入れをし、8 名が実習を行っています。
佐々木：ベトナムの方は。
高橋：ベトナムは、今 20 数名です。
佐々木：じゃあ中国の方が圧倒的に多いのですね。
高橋：圧倒的に多いですね。うちに入っているベトナム人の実習生は仕事内容が違っていて、中国人とインドネシア人は溶接の仕事。ベトナム人は足場担当なのです。とび職ですね。元々受け入れている管理団体も違うのです。うちの会社は北造協同組合として、独自に組合を立ち上げています。ベトナムの方は、建設業界に強い管理団体があるようです。そちらの方から受け入れています。
佐々木：では会社（北日本造船）が足場の管理団体に直接依頼して、そこから派遣されているのですか。
高橋：いや、本社（北日本造船）が直接指示を出して受けているのが 250 名。ベトナムの方は、うちに入ってくれている足場屋さんの

方が必要に応じて、独自で動いています。
佐々木：北日本造船さんが直接依頼しないのですね。足場は足場で専門が違うからですか。
高橋：足場屋さんは、うち以外の仕事も持っていて、その中で人のやり繰りをしています。常にうちの現場に入っている訳ではないというのがあります。
佐々木：今後ベトナムの方にはお願いする予定はないのですか。
高橋：ベトナム人も、これから検討していくつもりです。

中国の実習生が多い理由

佐々木：これまでベトナムの方を雇わなかった理由はあるのですか。もう中国の方で充分人が来ているからですか。
高橋：そうですね。もともと、当社と関わっていた企業が、20 年以上前に、「外国人実習生を受け入れてみないか」という提案をされ、それがきっかけで、お願いするようになったのです。その時に、中国の企業を紹介してくださって、それがうまく話がまとまったこともあり、中国人のみ受入れてきました。受入れたばかりの中国人たちが一生懸命仕事をし、評判も上々でしたので中国人のみ実習生として受入拡大していきましたね。人材的にも能力的にも問題なかったのです。
佐々木：5 年前に聞いた時には、中国の方は国の経済が豊かになっているので、働くと言うよりも経験を積むために来ている。そのためか、交渉とか要求が多いので、だんだん関係が難しくなってきていると聞きましたがどうですか。
高橋：それは５年前ですよね。そうですね、その後の状況は、もっと顕著になってきています。正直ちょっと悪目立ちしてきたようなところもあります。経済的なことを言えば、日本に来て稼いでも、中国で稼ぐ倍くらいしか現在は稼げないです。もちろん田舎から出てくれば、格差は３～４倍はあります。弊社の方で受け入れているのは中国の遼寧省の大連です。その周辺の人たちを受け入れていますが、大連周辺は格差が以前のように５～６倍と大きな開きがありません。それもあり、彼らも「なんで日本に来たの？」と聞くと、「ちょっと日本に来てみたかった」とか、「日本の生活どんなものか体験してみたかった」だとか。あとは、「日本で欲しいものがある」だとか、そのような回答でした。

例えば、受け入れ当初、もう 14 年前になりますけど、その時は自販機でジュースを買うような事は絶対ありませんでした。とにかく節約、節約して家族に送金するというのが目的だったようです。ところが、今はもう自販機でバンバン買っています（笑）。目的も変わってきていますし、以前は賃金格差がより顕著にあったため、彼らにとってみれば日本に行けば大金を稼げるというような夢にもつながっていました。とにかく頑張ろう、粘って最後まで技能実習生という制度にしがみつこうという気持ちがありましたけど、今はちょっと嫌なことあると「もう帰ります」とか、「もういいです」となる。そういうところが見えますね。

佐々木：最近では、ベトナム人の方が夢を持っている感じですね。
高橋：そうですね。直ぐに帰りたがる、辞めたがるということは日本人以上にその後の対応が大変なこともあり、そろそろ中国人実習生を受入れることも難しいかなと思っています。

インドネシアの実習生

佐々木：インドネシアの方はどういった経緯で雇うようになったのですか。

高橋：インドネシアは新しく出来たパイプなのです。当社が所属している団体で、日本中小型造船工業会という団体があります。そこの元専務理事が、インドネシアに精通している方だったのです。そこで「インドネシアの人材は非常に優秀で良い」という推薦もあり、「じゃあ一旦入れてみよう」というのが始まりです。ただ、壁になっているのが宗教です。彼らはイスラム教のため、そこの戒律の問題で、食事を出しても、「豚肉は食べられません」とか。あとは、お祈りの時間。毎日やらなければいけないので。それがネックになるのですけど。受入前に「お祈りは自宅でやってもいいけど、会社の仕事の時間はやめにしよう」という約束をしています。豚肉については、お弁当屋さんにお願いして、「豚肉抜きの弁当作ってください」ということで対応しています。

　あと問題はラマダンですね。それも約束して日本でラマダンはやめようと。ご飯食べない、水飲まない。これを炎天下で行う／／佐々木：死にますね、それ／／仕事すると倒れるのですよ。溶接業ですから。それが今年の５月位に、ラマダンを決行している子が一人いまして。仕事やりつつ。ですが発覚して面談後すぐに、言うことを聞きラマダンは辞めました。面談の際には「命の方が大事」という事を繰返し話しましたね。ヘルメットかぶって、長袖長ズボンで 30℃以上の炎天下です。汗だくになります。それでご飯も食べない、水も飲まないとなるとさすがに危ないですよね。

佐々木：インドネシアの実習生は受け入れはじめて何年目ですか。

高橋：まもなく１年というところです。

佐々木：今年も受け入れなど決まっていたのですか。

高橋:去年の 10 月に受け入れ開始して､現場に出たのが 11 月｡これが彼らの第一陣でした。本来であれば、今年も受け入れようということだったのですが、新型コロナの影響で新規受入もままならない状況です。

新型コロナウイルスの影響

佐々木：今いる 250 人は、本国に帰れず日本に居続けているのですか。

高橋：いえ、順次帰っていますよ。実は 250 名がピークで、現在はどんどん帰国し 160 名まで減っています。帰る一方で受入は全くありません。

佐々木：皆さん３年経ったので、帰っているという感じですか。

高橋：そうですね。

佐々木：今残っている 160 名は、帰れなくて延長している人もいるのですか。

高橋：帰れなかった子たちもいたのですけど、何とか一ヵ月遅れで帰国できました。

佐々木：行政から何か指導は入りませんでしたか。契約終了したら早く帰国させるとか。

高橋：今回はあらかじめ入局管理庁で、延長措置が取られていたのです。このコロナ禍で帰国したくてもできない実習生は、予め申請すれば半年間期間が延ばせるという制度です。中国便も一時期は完全にゼロになったのですが、徐々にですが国際線が飛ぶようになりました。ただなかなか団体でチケットが取れない中手配する事は大変でした。

もともと成田空港から中国の大連まで、片道５万円位です。ところが現在は片道 25 万円。それに PCR 検査も必須で、それが３万８千円するのです。青森からの交通費もありますから、もう組合がもたないのではないかというくらい費用がかかっています。一人で 30 万以上。弊社は受入数も多いので、一回で 40 名とか帰国します。この間は約 1200 万円費用がかかりました。この状況が続くと厳しいですね。

佐々木：その辺の補填とか、国の補助金はないですか。

高橋：何も無いですね。

特定活動で来日する人々

高橋：最近、技能実習生の次のステップにあたる造船就労者という制度で来ている人もいます。国土交通省で時限措置で制度化したものですが、技能実習が３年間終わった後に「また日本に来たい」、造船会社も「呼びたい」という場合には、特定活動という在留資格で働けるのです。制度は５年間の期間限定です。ちょうどオリンピック前後で５年間ですね。現在受入れている中国人の大半がその資格で来ています。給料もいいとおもいますよ。例えば、基本給も日本人の高校新卒４年目と同等、残業代もつくので年収だと結構よくなります。低賃金の安く使える労働者というよりは、日本は人手不足なので、労働力を確保するために高い給料払ってでも「来てもらう」、「来ていただく」というイメージです。そういう方向にシフトチェンジしているのは感じますね。

佐々木：以前、北日本造船で働いた方が戻って来るのですか。

高橋：そうですね。それがメインですが他の造船所の方も来ています。当社以外の造船所は、四国や九州地方になるのですけど。その地方の造船所で実習上がりの人たちも半分程度おります。

佐々木：ちなみにその人を送ってくれる中国の派遣会社というのはあるのですか。

高橋：あります。そういった技能実習だとか、就労者の派遣とあとは船員の派遣業務をしている企業です。

現地訪問について

佐々木：中国へは面接などのために訪問するのですか。

高橋：人材を採用する時は必ず行っていました。

佐々木：年に 1 回とか 2 回ですか。

高橋：人を増やしていた時は年に 3～4 回は行っていました。よく行っていたので、中国大連も馴染みになってきたなという感覚でした。

佐々木：行くと１回どれぐらいの期間でしたか。

高橋：そんなに長くないです。２泊３日から３泊４日。

佐々木：短いですね。本当に行って、すぐ帰ってくる感じですね。

高橋：そうですね。溶接試験と面接試験と、特に性格を重視しますよ。溶接の技能はある程度わかるのですが、性格を重視しているつもりでも人柄はなかなか分からないですね。

佐々木：中国の送り出し機関は、日本語教育をしっかりやっていますか。

高橋：まあまあですね。期待したレベルには達しません。

佐々木：最近、ベトナムは日本語学校増えて、派遣会社ががんばって日本語教えている印象を持ちました。でも実際に生活するのとはまた別ですからね。

高橋：中国はこれから尻すぼみしていく印象を持っています。賃金の面でも日本に来るメリットがあまりありません。

佐々木：中国の人口も今後、減少していくので、実習生の派遣は今後他の地域になってくるのですかね。

最近の実習生の傾向

高橋：また、最近技能実習生で募集しても、なかなか若い子は来なくなりましたね。30～40 代が中心です。／／佐々木：前は 20 代が中心と言っていましたけど。／／技能実習生でも 30 代、40 代ですし、造船就労者ですと 1 回実習生経験している子たちなので、さらにもう 50 代前半もいるんですよ。そうすると身体の問題が出てくるのです。やはり腰が痛いとか、膝が痛いとかそういう話になってくる。年齢層が上昇し、受け入れが 250 人いれば病気になる人もいるのです。例えば、いままで受入れた中国人のうち２人ががんになりました、日本でがん治療もして、会社もサポートもしました。ただもう日本での治療も限界があって。徐々に悪くなってきて抗がん剤治療していましたが、「まだ自分で歩けるうちに、本国に帰国させよう」ということで帰国させました。その人は帰国して一か月後に亡くなりました。やはり年齢重ねると、そういう問題が出てきます。

佐々木：仕方ないですね。では北日本造船としては、中国の方はこれを機に少しずつ減らし、新しい国に変更しようと思っていますか。

高橋：私はもうガラッと変えたいなと思っています。

佐々木：今度はどの国の方に変更したいですか。

高橋：ちょうど今インドネシアが入っていますので、そのまま拡大しても良いかな、と。あとはフィリピンとかベトナムですね。

フィリピンの実習生

佐々木：フィリピンの方の話はあまり聞いたことがないのですが。

高橋：まだお話してなかったのですが、中国、インドネシア、ベトナムの他にフィリピン人も 20 数名入っています。その方々は当社の直接の管理ではないのですが。足場でもなく、四国から臨時工員として来てもらっています。人手が足りないためスポット工員として呼んだ会社の中に、フィリピン人が多く在籍している企業がありました。想像以上にそこのフィリピンの方がすごく腕が良くて。さらに人柄もいいと。

佐々木：男性ですよね？

高橋：男性ですね。

途中帰国の事例

佐々木：途中で帰国、失踪する人はいないですか。

高橋：たまにいますね。以前あったのは入国して 1～2 ヶ月ぐらいで、近くの水産加工の女性と仲良くなって二人で失踪。あとお店で万引きして警察に捕まり、帰国させられる

と本人が思い込み失踪。あとは現場でトラブルを起し、揉めて大暴れして、その後の処分を恐れて失踪する。そういったこともありました。

佐々木：そうすると、最初から職場が嫌でいなくなったというよりも、何らかのトラブルを起こして、強制的に帰らされるのが嫌で逃げた感じですね。そういう場合は派遣した会社からクレーム来たり、保障してくれたりはないのですか。

高橋：ないですね。だからうちの会社に対してなにかあるわけでもない。

実習生のニーズ

佐々木：社員さんは現在どのくらいいらっしゃいますか。

高橋：造船会社で現在 1800 人ほど働いています。そのうち 200 人前後が外国人。本来であればみな日本人で 1800 人在籍することが理想です。しかし集まらない分を外国人を招聘し作業にあたってもらいます。

佐々木：もう少し実習生増やしたいですか。

高橋：いえ、今造船業は現在景気があまりよくありません。日本全国、軒並み造船業界は右肩下がりで。受注量が減っていまして。そこに今、新型コロナウイルスで今後の荷動き量も不透明になり、なかなか契約が決まらない。船と言うと国と国との荷物運ぶのが主な仕事ですから。これから先、どれだけの荷物が動いていくか、この状況ではわからないので。こういう状況下では、船を発注しようという気運がなかなか高まりません。そのため、これから造船業界、当社も含め縮小傾向になる可能性もあります。

佐々木：北日本造船さんは、日本でも有数のケミカルタンカーを製造するのが中心なので、大丈夫かと思っていたのですが。

高橋：そうですね。今はケミカルタンカーもこれまでのような発注が右肩上がりではありません。ですが第一次ケミカルタンカーブームは 2000 年ぐらい、船の寿命はおおよそ 20 年程度でるため、まもなくその買い替えの需要があるのではないかと予想しています。おそらく 3 年後ぐらいに需要が増えてくると思います。その間の 3 年をどうしのぐかということが課題でしょうね。そのため、ここ 2〜3 年はどうして作業量が少なくなる。そのため、一旦現在受け入れている実習生で一区切りとする事も考えています。その後、受入再開した際には受入国を改めて検討したいと個人的には思っています。

特定技能

佐々木：2019 年から特定技能の制度ができましたが、それについてはどうお考えですか。

高橋：当社はまだ利用してないです。現時点では受入れの必要がないので。また特定技能に対し「中国政府がまだそれを認めてないので送出し出来ない」と現地派遣会社が話しており先に進めようとは考えていません。まだ当社にとっては使えないですね。

佐々木：それは盲点だった。日本が法律改正してこうしますって言ったところで、相手の国もそういう風に思って一緒にやってくれなければ、結局今と大して変わらない制度になってしまう。

高橋：あと一つ問題が。特定技能という制度は、日本の企業、例えば私たち北日本造船が直接、「ここに来たいです」っていう個人と連絡をとって呼ぶことができるのです。そうすると今までの送り出してきた機関は必要なくなってしまいます。つまり、送出し

機関は抵抗しようとするわけです。「うちは間にはいって、手厚くサポートをしますよ」といった売り文句ですね。日本政府は個人で招聘していいと言っているのですが、現実的にそうならなくなるかもしれませんね。

佐々木：そうすると、日本の出資会社が、向こうに派遣会社を作り出すとかっていう話とかになってきますね。

高橋：それもあり得るかもしれませんね。

佐々木：特定技能の新しい在留資格は、働く人にはプラスになるし、危ない会社が減ったらいいなと思いましたけど。

高橋：特定技能で呼べる会社って言うのは、健全な管理をしている会社ですね。ちょっと怪しい、給料をまともに払ってないような会社は、特定技能で呼ぶことは出来ないでしょう。

八戸の事情

佐々木：最近八戸、で技能実習生を受け入れている話は聞きますか。

高橋：最近はそんなに聞かないですね。正直。

佐々木：去年ぐらいまではね随分人数多かったようですけど。

高橋：今八戸で外国人の人数が 1160 人ぐらいだったと思います。そのうち 200 人が北日本造船。他の実習生について最近は、新型コロナの影響であまり情報が入ってこないのです。情報交換もなくて。ただ変わらず水産加工会社さんは、受け入れていると思います。街歩けば外国人がそれなりにいますね。自転車に乗っているのは、大体実習生か高校生か・・という感じですね。

新型コロナの問題

高橋：正直。新型コロナウイルス対策は本当に大変です。技能実習生とか就労者は、みんな共同生活をしているのです。４人一部屋で。彼らもコロナウイルスをすごく警戒しています。仮に４人のうち誰かが夜遊びして帰ってきたとか、そういうことがあると、それが原因で喧嘩が始まるのです。「俺らが感染したらお前はその時どう責任をとるんだ！」とか。「会社はどう責任とってくれるんだ！」みたいなね。これは困ったなと感じています。例えば一人風邪ひいただけでももうね。一緒に住んでいますからうつるリスクがあります。風邪ならいいのですが、コロナか風邪かなかなか判断がつきません。そのため、申し訳ない気持ちですが、今は遊びに出るのは彼らの協力の下自粛してもらっています。「ちゃんとお互いのことを思って生活しよう」と。「何かあっても各々責任取れないでしょう」という話をして、何とか対応していますが。ストレス溜まるだろうな、と申し訳なく感じてもいます。

日本語のレベル

神：外国人労働者の日本語教育ですが、北日本造船やそれ以外の受け入れている企業の中でも、日本語のレベルの規定は明確にあるんですか。

高橋：規定はないです。介護だとＮ３は確実に取らせていいますが。当社の場合は腕が良ければＯＫです。溶接の技術を優先しているので、日本語は「今すぐ話せなくても、徐々

に覚えていくだろう」ということで受入れていました。ただ覚えない人はずっと覚えないですね。

神：全然わからない状態で、仕事の意思疎通とか、「こういう仕事をしてください」っていう指示とかはできるのですか。

高橋：その人が一人だけ日本人に混ざり仕事をするとほぼ意思疎通が出来ません。うちは 14 年間ずっと継続して受け入れているのですが、その中でリーダー格となる人たちが定期的に生まれてきています。その人は日本語もできて、仕事もできて。仕事の内容、流れもわかっていて。そういう人が指示出し役になって、各班に１人ずつ配置されているのです。その人が班長として、班員と意思疎通して、指示を出したりしてくれています。そういった流れが出来ているので、日本語が話せなくても彼らはやっていける。ただ結局それに頼ってしまって、全然最後まで日本語を覚えないという言う人たちもいるので、問題なのですけど。

佐々木：通訳さんいますか。

高橋：通訳は今２人、常駐でおります。ですが、「日本語を話せた方が仕事はスムーズだ」ということで、会社の方でも半ば強制的に毎週水曜日勉強会を開いています。最初の「あいうえお」から現場で使う言葉まで、２時間ぐらい毎週勉強していました。あとは八戸市の方の外国人向けの教育機関がありますが、連携して週に２回地度、公民館で授業を開催してもらうなど、協力して頂いております。何とか、皆レベルアップさせたいので、報奨金制度を設け、にんじんをぶら下げて、頑張る方には努力してもらっています（笑）。

佐々木：そういうリーダー格の人は、将来また帰ってきて欲しいですね。凄く優秀でやる気もある人が。

高橋：一番最優秀だった人は、7 年前に北日本造船の現場で仕事をし、現場の評判も上々、日本語試験のＮ２も取得し帰国しました。その方は中国の送出し機関にアルバイトとして入り、その後また北日本造船に送出し機関の駐在員というポジションで戻ってきました。現在は実習生の管理側で仕事しています。そういった成功例というか、本当に頑張っている方は、道が開けるものだなと思います。

佐々木：そういう場合、家族はどうしているのですか。呼び寄せて一緒に住んでいるのですか。

高橋：その方が来た時は 20 代前半でしたけど、今は 30 と少々くらいです。昨年結婚したので、呼び寄せる予定だったのですが、新型コロナの影響で往来ができなくなってしまいました。一年ぐらい会ってないそうです。

佐々木：可哀そうですね。

帰国希望者に対する対応

神：先ほどの話で、稼ぎに来る理由が昔と変わってきたっていう話がありましたが、中国の方が少しでも嫌なことあればすぐ帰るとか、少しワガママになってきているという話がありました。そうすると人が減るので、会社も困るわけですが、そういう時にどのように対応しているのですか。引き留めたりするのですか。

高橋：実習生 200 人いて、本国に「帰る」というような方は、たいていトラブルメーカー

です。その一人に結局、管理側も手を焼くわけです。だったらもう気持ちよく帰ってもらった方がいい、ということで「帰る」という話が出れば、今はもう「どうぞ」と帰ってもらっています。その方が会社全体としては、遥かにいいのです。昔はそういう方を何とか最後まで頑張り実習を満了してもらおうと、努力していました。ですが、そこにずっと手を焼いていても他の業務も回らない、その者だけ対応し続ける訳にも行かないですし。そうなると、ドライですが「帰りたい」と言ったら、じゃあ「帰ろうか」というような方針を取っています。

佐々木：なるほど。日本人の離職率ってどれくらいですか。結構高いのですか。

高橋：離職率は入社３年までの者で約３割ぐらいです。やはり現場仕事が多いですから。肉体的に辛いという方は一定数います。

佐々木：若くないとできないと最初に思いました。話を聞くと。

高橋：溶接業であればずっと一日中溶接をする訳です。集中力を要しますし、忍耐強くなければいけません。本当に向き不向きがあると思います。色々動いてアクティブに動きたいって人にはあまり向いていないかもしれませんね。

佐々木：気を抜けば怪我しますしね。

高橋：日本人は嫌だったらすぐに自分の意思で辞めれば良いですが、実習生は３年間継続しなければならないということが前提としてあるので。彼らの中には日本に来るために借金してきている者もいます。「何とか返済しなくてはいけない」という思いの強い人も多い中で、その途中で気持ちが切れたり、トラブルになったりすると、やめるにやめられない。ただ仕事もしたくないしみたいな状況に陥って、心の病気になる子達もたまに出てきます。

残業について

佐々木：最近残業はどうですか。

高橋：そうですね、残業も以前より減ってきています、実習生や就労者からは「残業させてくれ」と訴えが時々ありますね。

佐々木：そうじゃないとお金が入らないから。

高橋：私が一番思うのは、「技能実習生」という名称をやめて欲しい。実際実習計画に沿って仕事はして貰っていますが、彼ら自身は自分のことを実習生だなんて思ってないのです。お金稼ぎに来ている。今日本の企業は労働力として彼らを呼びたいというのが正直なところでしょう。そこに技能実習生という的外れな名称がついているため、世間のから叩かれる原因になってしまっている。「実習で勉強しに来ている子達にそんなことさせていいのか」のような。そういう誤解を生んでしまう。ただ、「仕事が奪われる」というそういう声もあるため、なかなか「技能実習生」という名目を変えるのが難しいのかもしれないですよね。

佐々木：実際人手足りてないのだから。ちゃんとお給料出ているし。実習じゃないですからね。厚生労働省はすぐ「勉強しに来ていただいています」とか平気で言いますからね。

高橋：来ているのは 40 歳のおじさんですから。40 歳のおじさんが「実習です」って来たって、「いやいや働きに来ただろ」って皆直感で思いますよ。

佐々木：本国に帰って学んだことを活かすということが名目ですが、溶接はどうですか。皆さん、本国に帰って使っているという話は聞きますか。

高橋：半分ぐらいですかね。ただやはり３年終わって帰る時「もう溶接はやりたくない」という方が多いです。「日本で稼いだお金で違う仕事したい」と言って帰るのですけど。ただ半分ぐらいはやっぱり溶接業に戻ってきるようですね。結局、お金無くなって、自分には溶接しかない、ということになるのかな。

佐々木：逆に言うと溶接の方が手に職を持っているような感じになるのですかね。工場労働とかは何の技能を実習しているのだろうと感じます。帰っても何も身についたものは無いという。

高橋：確かに溶接はまだ実習と言えるのかもしれないですね。中国に彼らが帰り、また造船会社で溶接の仕事をすると、班長クラスで雇入れられ、給料も好待遇なようです。そういった意味では日本に来た意味というのは、中国に帰ってもちゃんと役に立っていると言えると思います。

2　みちのく中小企業協同組合

調査概要

2020 年 10 月 31 日　午前 10：00～11：00
参加者：佐々木てる　神なぎさ　前川美穂香　亀岡紗衣
語り手：長宝淑霞
場所：事務所

会社データ

108 名（中泊、七戸、東北町、八戸、三戸、
　　15 社と契約、派遣）
　　主に建設業、農業、水産加工
送り出し機関：ハノイ 3 社と提携
ベトナム人中心、中国人。
モンゴル人増加中。2019 年より微増。
現在：通訳 2 名、仕事内容：管理、
　　電話相談など

実習生の数

長宝：今年は 3 月に 12 名です。ただ 4 月からはもう全然です。止まっている状態で、入国できない。
佐々木：こちらの事務所にはいつ移動されたのですか。
長宝：2 年前ですね
佐々木：以前お会いした時からずっと受け入れ機関続けてらっしゃるのですね。
長宝：ええ順調に増えていると思いきや、今年は全然入国できていなくて。今は 16 人申請中なのですけが、ビザが降りたらまたそれなりの心配もありますけど。
佐々木：国はベトナムですか、中国ですか。
長宝：ベトナムです。
長宝：ベトナム人 16 名で、あとは去年通訳 1 名採用したのです。その人もなかなか入国できなくて。一緒に入国してもらう予定なのですけど。（ただ、日本での仕事もなくなって）実習生の人数もかなり減っています。ただ採用した以上、内定取り消しというのはできない。現在 108 名登録しています。
佐々木：　108 名はすごいですね。

長宝：少ないほうです。
佐々木：どんどん減りつつあると言いましたけど、108 名ですか。

モンゴル人の増加

長宝：そうですね。あとモンゴル関係は増えました。前回（お話した時）はモンゴルの実習生はなかったのです。去年２人入国して、今年はまた６人来る予定です。現在はこの新型コロナの影響で入国できない状態です。
佐々木：知り合いの方がいらっしゃったのですか。
長宝：そうです。紹介してもらいました。
佐々木：これからまたモンゴルの方が増えそうですね。では今はベトナムの方とモンゴル、中国が中心で 108 人

実習期間の変更

佐々木：期間終わって帰る人、もしくは予定だった人はいますか。
長宝：います。帰れなくて延長して、さらに延長という感じです。平内町の技能実習一人、ベトナムの子なのですけど、その人が半年延長しました。12 月９日あたりで、また在留期限が終わるのですが、この間本人と会いました。「どうしよう。帰れないです」って、再度延長する話をしました。
佐々木：再延長もできるのですね。
長宝：そうなのです。でも帰れなくて皆は悩んでいます。中国の方は半年延長して、もうこれ以上はどうしても嫌だっていうことで、９月初めに３人は帰国してもらったのですが、飛行機代が高くて、半端じゃないです。一人当たり、国際便で 26 万４千円。

ベトナム人通訳

佐々木：どのように通訳さんを探したのですか。
長宝：募集ですね。送り出し機関を通してお願いしました。今後面接するにしても、通訳いないと大変なので。ベトナム本国に面接に行って選んできた人です。ハノイです。技能実習生の面接をおこなって、その時に通訳も。
佐々木：では、今回の方は日本に住んでいた経験はないのですか。
長宝：なかったのです。なかったのですけど、たまに出張とかで、短期で何回か日本に来たことはあるみたいです。（中略）これからはベトナムの方増やしていきたいですね。

「特定技能」の問題

佐々木：特定技能制度ができて影響はありましたか。
長宝：何回も相談は受けたことはあるはありますけど、話をしているうちに、また検討してみますという話になるのです。進まないのです。／／佐々木：進まない／／全国的にも、人数は増えてないと思います。制度ができてから、去年の４月からですから、もう１年以上ですね。
佐々木：今までの技能実習の枠がまだ残っているためですかね。
長宝：それもあると思います。特定技能の支援機関登録もしたのです。でも一人も受け入

れていない。準備はしていたのですけど、進まないのです。特に中国の方は、興味がないみたいです。送り出し機関を通さず、直接雇用するので。中国はもちろん、他の国でも同じだと思います。要するに直接雇用するとトラブルがあった時に誰が対処するかが問題になるのです。今のままだと、全部大使館のほうに相談になってしまうのではないでしょうか。だから窓口がないと困ると思います。ただ派遣機関を通せば、実習制度とあまり変わらない。派遣機関がなければ、支援機関だけでは解決できない問題もありますから。

佐々木：そうすると、派遣機関がお互いの国にあって、そこでやり取りした方が、何か問題
があった時に、それが解決しやすいのですね

長宝：そうですね。

中国は撤退

佐々木：これまで派遣機関とはちゃんと関係性を結んできていますからね。言語の問題もありますし。

長宝：中国語に関しては、私は直接話ができるので問題ないのですが、ベトナム語となると専属の通訳で。モンゴル語となると相談員がいます。常勤ではないが、お願いすることはできます

佐々木：中国の派遣機関は、何社くらいと契約していますか。

長宝：今だいぶ少なくなりました。中国は撤退しつつあります。もう、メリットがないというか、生活レベルも向上してきたので、特に賃金の面ではあまり変わらないので、募集をかけても来ないのです。私たちは、モンゴルのほうに切り替えているのです。現在中国は２社。２社だけなのですが、来年また１社減ります。

佐々木：中国はもうほとんど撤退です。

長宝：来年は２つの送り出し機関でも、一人も入れない予定です。一人も来ないというか、面接してないです。全部ベトナムとモンゴルに切り替えています。

今後の中心はベトナム

佐々木：ベトナムはハノイのほうに。

長宝：ハノイが３社です。

佐々木：３社ですか。ハノイはどこの会社がいいとかあるのですか

長宝：Ａという会社があるのですけど。

佐々木：どうやって派遣会社を選ぶのですか。向こうには、200 社以上あると聞きますが。

長宝：どれがいいかはよく判らないです。最初はその会社の営業マンが営業に来てくれて、「どうですか」という話で。それでちょうどその時「雇いたいな」っていうタイミングで、何回か話をしているうちに、「あぁ、良さそうだな」と思ったら、見学して。それから社長にも会って。あとはスタッフとか、学校とかも見学します。まあ、最初は色々考えたのですが、たくさん見てみんな同じだってなって。結局今はどれがいいのかわからなくなりました（笑）。

佐々木：以前はベトナムもずさんな機関が多かったけど。ずいぶんしっかり管理するよう

になったイメージありますね。

長宝：日本が厳しいですから。ちゃんとしないと本当に遠慮なく、容赦なく認定が取り消されます。お取引のあった送り出し機関が、派遣停止になったのです。おかげで５月に入国予定が、10 月に伸びて。政府機関から調査まで入ったらしく。これから入国というときに。

佐々木：チェックが入った一番大きい原因なのですか。

長宝：そうですね、やっぱりお金の流れじゃないですか。

佐々木：寮生活みたいになっていたので、生活費もきっとかかりますね。

長宝：泊まり込みですから。FB のメッセンジャーで話はするのです。「いつ日本に行ける」って毎回聞かれる。こっちも確かな答えもできないので、もう何万人も待機しているじゃないですか。

新型コロナによる影響

佐々木：（新型コロナの影響で）日本にいるベトナムの方の仕事は減っていませんか。

長宝：仕事のない人は今のところいないですが、仕事量は少なくなりました。

佐々木：仕事が少なくなったことで、問題が起きている話が全国的なニュースになりましたがこちらでは問題ないですか。

長宝：幸い、問題がなかったのです。

佐々木：今はどのあたりに実習生派遣しているのですか。

長宝：遠くには中泊町。そのほかには七戸町、東北町、八戸、あとは三戸ですね。

佐々木：職種は。

長宝：一番多いのは食品関係ですね。

佐々木：食品加工の工場とかですかね。

長宝：ええ。農業関係は今のところ、農業法人のほうですね。

佐々木：中泊はどんな職種ですか。

長宝：建設ですね。建設の仕事は今あまり多くないです。建設関係は、中国とモンゴル両方から受け入れています。これからは中国はやめてモンゴルですね。

インドネシア・ベトナム事情

佐々木：108 人のうちベトナム人って今どれくらいですか？

長宝：ベトナム人は 70 名ちょっとです。中国人は少なくなっています。７～８割ベトナム人です。他の組合さんは、これからどこの国から受け入れようか、と考えているのではないのですか。ベトナムだけではなくて。

佐々木：昨日の話だとインドネシアの話も聞きました。

長宝：宗教の面ではどのようにされていると言っていましたか。

佐々木：最初にちゃんと話し合って、仕事中はお祈りの時間をとらないようにとか、ラマダンは、一切飲まず食わずだと仕事にならないのでなしにするとか。あと豚とかはさすがに食べられないので、その辺は気を使ってお弁当を作るらしいです。

長宝：宗教のことがよく分からないのですが、重大な問題だと認識はしています。それにしてもインドネシアから入れたいというのはどうしてでしょう？

佐々木：たぶん介護士の人材不足で、インドネシアから協定を結んで日本に来てもらっていましたから。これまで経験上、働きに来てもらいやすいのではないでしょうか。あと経済格差がまだインドネシアと日本だと少し広いのかもしれません。中国だと、ほとんど経済格差なくなっているので、中国の方も日本でわざわざ働く必要ないと思います。インドネシアやベトナムのほうはまだ多少経済格差あるので、日本でしっかり働いて貯蓄が増やせるのではないでしょうか。こういった背景からインドネシアの方が増えているとお聞きしました。

長宝：そうですね、他の国もそろそろ考えないといけないですね。

佐々木：ベトナムも介護士の派遣考えていて、かなり本国で勉強も一生懸命やっているのを見てきました。そういった本国の傾向もあって、日本はベトナム人実習生が最も増えています。

長宝：かなり増えました、最近では犯罪に関するニュースとか取り上げられていることも。うちの通訳が「もう恥ずかしい」と言っていました。同じベトナム人として。

佐々木：人が増えればね、トラブルも多くなりますね。

佐々木：ベトナムに行くと皆さんすごく希望をもって一生懸命勉強して、日本に行って頑張って働きたいと思っているのが伝わってきます。ところが日本でいい会社に入れればいいけど、必ずしもそういうところばかりじゃない。それでひどい目にあってという事例もあります。

長宝：幸いにして、うちのベトナム人実習生は問題ないです。従業員さんと仲良くて、一緒に浅虫水族館に行ったりとかしています。「今日もまた出かけたの」って聞いたら、「うん、従業員の皆さんと釣りに行った」とか。知らないうちに(笑)。

佐々木：よかったです。そういう話聞けて良かったです。実習生で来ている方、ほとんど日本社会とまったく交流がなく、他のこと何もしないで実習期間が終わったらもう帰っていくとか思っていたのですけど。

長宝：月１回または２回、実習生に日本語講座をやっている会社もいます。

佐々木：日本語講座、最近はどうなっていますか。

長宝：オンラインでやっています。在籍している実習生の日本語力を高めるために。

行政との連携

佐々木：行政との連携はどうですか。

長宝：八戸の国際交流協会では、昨年組合の通訳を講師にむかえベトナム語講座を実施しました。それは日本人対象ですけど。

佐々木：行政はあまりやらないのですね。

長宝：この間、国際交流協会の担当者が組合に来たのです。技能実習生を受け入れているところは、皆、何かと悩んでいるので、そこで、座談会を開いて皆さんが悩んでいることを話し合おうと計画しています。また、「技能実習生と接する時に役に立てるため、ベトナムの文化を紹介する企画なども考えているようです。

農業関連の仕事

佐々木：こちらの機関で派遣しているのは食品加工関係が多いのですね。

長宝：はい。食品が一番多いです。
佐々木：今のところ建設と食品加工ですが、それ以外の業種はどうですか。
長宝：農業ですね。
佐々木：農業はどんな仕事になるのですか。
長宝：昨日、農業関係の会社に行ったのですけど。そこでは人参をちょうど収穫していて。人参たくさんもらいました(笑)。
佐々木：年間を通しての農業関係もいろいろとありそうですね。
長宝：そうですね、今度冬となると漬物とかになります。一応農産物加工もそれもやりながら、メインは農業なのですけど。関連作業としては少しやっています。

監査業務と相談について

佐々木：監査というか、様子見に行ったり、相談を聞きに行ったりするのは月にどれくらい行っているのですか。
長宝：監査は 3 ヶ月に一度行いますが、用事があればその都度、行きますので、回数とはあまり関係ないですね。
佐々木：大変ですね。
長宝：特に実習生の多い会社となると、体調の悪い人を病院に連日のように連れていく。世話は大変ですね。／／佐々木：いやいや、人一人面倒を見るのも大変ですから。／／何から何まで、悩み相談。特に通訳は５時以降になるともう電話は鳴りっぱなし。みんな仕事終わって夜になると電話するから、そしたらもう休めない。
佐々木：確かに。
長宝：それで通訳さんをもう一人入れたいのですが、このコロナの問題で入国できない。
佐々木：今の通訳さんも休めないですね。
長宝：悩み事ばかり聞いているから、通訳さんも体調悪くなるのです
佐々木：基本悩み相談ですからね。いい話ではないことが多い。
長宝：悪いニュースばかり聞いて、通訳さんまでノイローゼにならないか心配です。
「今月給料少ないからもっと残業したい」とか。労働法を違反するまで残業させるわけにはいかないので。理解してもらうのがすごい大変。「法律は法律、私はお金がほしいだけ」っていう人もいます。

契約している会社

佐々木：みちのく中小さんには、いくつ会社が登録しているのですか。
長宝：今は受け入れているのは 15 社。多くはないです。世話できる範囲でやっています。ただ受け入れるだけで、世話しないのはだめです

ベトナム人の本国への送金、家族事情

佐々木：ベトナムの方との関係は割と上手くいっている方だと思うのですが。
長宝：ベトナムの月平均収入が２万から３万円程度、１万５千円から３万円かな。皆すごい家族思いで。当組合の実習生に限って見ていると、皆凄い家族思いで、毎月必ず送金しています。手元にほんとうに５千円から１万円程度しか残っていない。たまに病

気にかかると「先生、お金ない」って言われるのですよ。立て替えるしかないです。「もう少し（手元にお金）残してよ」って。病気したりすることもあるので、送金することはいいのですけど、手元に少なくとも３万円は残してほしいなという時はあります。毎回毎回立て替えるのは、工面が大変なので。

国によっては送金の仕方も違います。中国だとまとめて 50 万から 100 万、一回で送金するのです。ベトナムとなると毎月、給料もらってすぐに 15 万とか。１万円から送金する人もいます。

佐々木：送金したらその分だけ手数料いっぱい取られるのではないですかね。

長宝：ベトナムは送金となると手数料はそれほど高くないのかもしれません。銀行は高いようですね。

神：先ほど、家族に送金するという話で、中国とベトナムでやり方が違うということを聞いたのですが、そこで国民性の違いが出るような気がしました。

長宝：そうですね。ベトナムの人は、家族想いで、自分のためではなさそうですね。たまに私たちが聞くのです。「全部送ると。そのお金使われて３年後何も残ってないじゃない」って。そうすると「いや、それはいいです」って。「親に送ったお金、それは私のお金ですが、親のものでもある、親の生活をよくしたいから」とか。あとは「兄弟の学費とかにあてたりしてもらえば」とか。そういう話になりますね。逆に、中国となると、「全部使われてしまうから旦那には送金はちょっとだけ」とか（笑）。そのかわり親のほうに送金する。親は保管してくれるので。全然送金しないと、旦那さんと喧嘩になるから、少しだけ送るとか。そういう人もいました。言い訳で「間違って親の口座に送った」とか言って。「俺はそんなに信用できないのか」って喧嘩になったらしいです（笑）。

佐々木：中国も日本もそんな変わらないですね（笑）。ベトナムのほうが家族想いですね。

長宝：強いですねぇ、家族への想いは。

最低賃金の問題

佐々木：今後はやはり、中国よりもベトナム。もしくはモンゴルあたりに少しシフトしていこうかなという感じですね。

長宝：そうですね、ベトナムとモンゴルですね。中国となると賃金で折り合いつかないので。

3　特別養護老人ホームみちのく荘

会社概要
社会福祉法人　青森社会福祉振興団　特別養護老人ホーム　みちのく荘
2014 年 11 月に国立フエ医科薬科大学、2017 年 7 月に省立フエ医療短期大学、2019 年 10 月に国立フエ中央病院と、それぞれ協働事業覚書を締結。

調査概要
2020 年 11 月 24 日（火）13：00〜14：00
場所：「青森公立大学大学院棟」「みちのく荘」（zoom）
話し手：みちのく荘　益城妃富さん
聞き手：佐々木てる　神なぎさ　亀岡紗衣　前川美穂香　佐藤乃愛　久保遥　榑井寧々
　　金澤零治　　工藤恵　秋元健大

これまでの経緯

佐々木：何年ぐらい続いて、今どんな状況なのかを、少し説明をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

益城：理事長が全国老施協の方の仕事もしていまして、そのなかで EPA（経済連携協定）が始まるということを耳にしました。平成 20 年ですね。その時に、そういった EPA の活用は今後どうだろうと、問いかけをしました。最初は賛否両論ありました。ただ、長い目で見たときには、日本人だけではこの介護が回らなくなるっていうのは推測できていました。それから職員の中から、「国際貢献になる」と。介護としては先駆者である私たちが、インドネシアとかベトナム、後にはフィリピンも入ってきましたけど、そういった国の人が自分たちのところで学んで、本国に帰って経験を活かしてもらえる。そういう「国際協力としての役割があるだろう」という意見が職員の中から出たのが、決定的でした。長い目で見たときには、日本人だけでは介護現場は回らなくなるという見通しが一番ですね。

佐々木：最初は何人くらい受け入れたのですか。

益城：最初は２名です。EPA でしたのでマッチングがあります。こちらも選んで向こうにも選んでもらわないと。なので、10 人ほしいから 10 人が来るということではないです。

最近は６人とか希望出してもマッチングは０です。ほんとに、青森は人気がないのです（笑）

佐々木：最高で何人受け入れていいというのは上限あるのですか。

益城：「ない」と言ったら極端な話ですけど。逆に受け入れ側として、そんなに多くは無理だと思います。お金もかかるので。

佐々木：日本人の職員さんは何人ぐらいいらっしゃるのですか。

益城：法人はトータルで、直接処遇ばっかりでなく、間接処遇の分も含めると 300 人ですね。

佐々木：介護職の方はどれくらいですか。

益城：介護職は、100 人ちょっといると思いますね。

佐々木：多いほうですか。100 人は。

益城：多いほうだと思います。なぜならば国の基準の３対１をはるかにクリアして、２対１の配置をしていますので。あとは、介護関係の事業所を持っていますので、そういうことで多いと思います。

インドネシア人

佐々木：日本に最初にいらっしゃった方はやはりインドネシアの方ですか。

益城：そうです。経済連携協定が最初はインドネシアだけでしたので。

佐々木：その後ほかの国の方もいらっしゃったのですか。

益城：その後ベトナムですね。やがてフィリピンもありましたけど、うちはフィリピンからは取ってないです。

佐々木：ではインドネシアとベトナムの方のみ。

益城：はい。

佐々木：何年ぐらいのローテーションですか。

益城：受験資格を得て、受験をするというところまでが約束ですので、だいたい３年、４年です。

佐々木：だいたい３、４年で受験資格が得られるという感じですね。

益城：はい。実務者の国家試験受験の条件と同じですので、３年経つと受験資格が得られます。

佐々木：みなさん資格取られた後に、受験されて、合格されるのですか。

益城：うちは合格率高いのです。11 人受験して、10 人合格です。そのあとでその不合格だった１人も再受験して合格したと聞いています。

佐々木：合格した後またそちらの施設で働きたいというお話は出ないのですか。

益城：それが０なのです。最大の課題ですね。理由は何かというと、まずインドネシアについては宗教の問題。それから雪国というこの寒さの問題が１、２位ですね。

佐々木：宗教の問題は具体的にどんな問題がありますか。

益城：インドネシアの人たちは、こちらにモスクがないので。モスクがないことがやはり、自分の信仰を続けていく自信がないということでしたね。みんな口をそろえてそれは言います。

佐々木：１日５回ぐらいお祈りがありますね。そういうのはどういった形でやっていまし

たか。

益城：だいたい朝・昼・晩の間に、私たちのおやつの時間みたいな。ただそれも、季節で時間が変わるのです。向こうでどういう教育を受けてきたのか、非常に宗教心の強い人は割とその時間を守ります。ただ中にはやはり日本で仕事をしながら、自分のお祈りの回数を強制するのはいかがなものかということで。４回目と５回目をまとめてとか。夜に、時間たっぷり使ってやるとか、という方もいらっしゃいました。最近までいた子は、お祈りの時間にお祈りができないっていうことが非常なストレスだったみたいです。あと、あと１年に１回のラマダン、断食の時期が１か月あるのですが。その間は、日が出たら日が沈むまで食事とれません。水も飲めないので、「その間の入浴介助はちょっと辛い」というのを相談されたことはありました。

佐々木：食べ物とかはいかがでしたか。

益城：食べ物はとにかく食品表示内容をよく見ていました。インドネシアは、要は豚肉とアルコールがダメなので。食品表示の中にみりんとか、ポークエキスとか入っているとだめです。なので、インスタントラーメンとか、そういうのはもう絶対に口にしませんでした。

佐々木：自分たちで作られていましたか。

益城：お昼ご飯はこちらから提供すると言ったのですが、そういうふうに、食べられないものがいっぱいあるので、みんな自分でお弁当を作って来ていました。そのうち通販とか、近くのスーパーでもハラール食品が売っているのがわかって、そういうとこから購入したり、通販で買ったりしていました。

現在の状況

佐々木：現在は受け入れていないですか。

益城：今は、介護は０です。調理の実習生が２名いるだけです。

佐々木：調理実習生はインドネシアの方ですか。

益城：いえ、ベトナムです。最近はもうほとんどベトナムですね。

佐々木：在留資格は何になるのですか？

益城：調理の子は技能実習です。EPA で来た子は特定活動。

佐々木：EPA で来た人たちはどのような給与体系になっているのですか。国から援助とかあるのですか。

益城：ないです、ないです。条件としては、日本人と同等という条件がありますので、大卒には大卒分お支払いしました。100％大卒ですが。看護師の資格があるという条件もありましたので。

利用者さんの反応

佐々木：入居者さんとか、利用者様の反応とかはいかがでしたか。

益城：入居者の方は大好きです。EPA の子たちが。

佐々木：そうなのですか！へえ。

益城：はい。あの日本語がわからない分、本人たちは利用者の話をちゃんと聞かなきゃい

けないという、いわゆる傾聴の姿勢があります。なので、利用者は EPA の子たちは大好きでしたね。女性、男性どちらもです。

佐々木：皆さんはどうでしたか。日本の介護の現場で苦労したとか、話はされていましたか。

益城：そうですね。１名インドネシアの子が国に帰って。看護師の仕事をしていました。その人が、手術室の担当に移った頃に、ちょうど私もインドネシアにいて。その子とちょっと会う機会があって。それで「日本で学んだことが、今の手術室の仕事に役立ったことはありますか」と聞いたときに彼が、「１人１人を大事にする姿勢を学んだことがすごく役立った」と。「ほかの看護師と比べて、自分はそこが違うとこだ」と話していました。あと苦労したのはやはり、日本語がわからないことだと思います。なおかつ方言もあるので（笑）。

佐々木：津軽弁、まあ特に入居者さんなんかは、

益城：お年寄りですからね。

施設を辞めた後

佐々木：インドネシアの皆さんは、日本に残らずそのままもう本国に帰られ方が多いですか。

益城：いいえ。うちにいたほとんどは大阪の施設にいます。うちの子の半分以上は、いるのではないでしょうか。うちで資格取った子は。同じ施設にいます。皆、同じイスラム教で１つのコミュニティのようなものができているので。仲間のところに行くのですね。だからリーダー格の人が１人そこにいて、みんながそこに集まって行くっていうそういう流れがあるみたいです。大阪なのです。割とベトナムもインドネシアも都会好みで。

佐々木：青森に戻ってきてくれるといいのに。

益城：そうなのです。それがやはりモスクの問題と雪ですよね。第一陣で来た子が合格した後１年間うちに残ってくれました。後輩の教育のためにも残ってほしいということで、１年間を約束して残ってくれました。それで、その人の旦那さんが大阪のそこの施設にいるのです。彼女も１年ここにいた後、その大阪に行きました。それで、続いた後輩たちがみんなその、大阪に流れていったと。そういう感じで、一度は国に帰った子たちもいるのですけどやはり日本でお金を稼ぎたいということで、大阪の施設に戻ってきているという感じです。１期生のその女の子は、今インドネシアにいて送り出し機関を立ち上げています。

佐々木：そうですか。すごいですね。

益城：はい。それでこの間会いに行ってきました。「インドネシアで自分たちが介護の基本を教えるので、施設で雇ってほしい」ということです。ルートづくりにはなったかと思います。

受け入れの苦労

佐々木：平成 20 年ですか。10 年以上たちますね。ご苦労されていることはどんなことがありますか。

益城：人が残らない。合格しても定着しないので、職員が「無駄なことをしている」とか、「そういうところにかけるお金があったら自分たちの給料上げたほうがいいのではないか」とか。そういうことではいろいろありますね。EPA で来たので、受験が条件になっていますから、仕事の時間を週に１回、１日勉強の時間にあてているのです。その時間も給料の支払いにしていますので。そうすると、同じ国家試験を受ける日本人と外国人では待遇が違うわけですよね。給料払って勉強できる立場と仕事しながら自分で勉強しなきゃいけない立場と。それで結局合格してもいなくなってしまう人ということで。その辺は職員の納得いかないところだったと思います。

佐々木：労働形態は週２日ぐらいお休みなのですか。

益城：変形労働取っています。

佐々木：皆さん休み期間に本国に帰るというのはありませんか。

益城：いる間に１回、多い子は２回でした。これもまた２週間の休みを取るんです。それがまた現場の理解を得るのには大変でした。彼らの言い分としては、遠い国に帰るので２週間必要なのだと。そのうちまわりも２週間が当たり前ということで、みんながもう当たり前になってきました。最初はちょっと大変でした。

技能実習生の受け入れ

佐々木：どこの監理団体を通じて実習生を受け入れていますか。

益城：東京にある監理団体で今は県内に支部ができたのでそこを使っています。今後介護の実習生を入れるときには、うちでも協同組合立ち上げたので。仙台のほうで。そこを通して受け入れる予定です。

佐々木：ベトナム中心になりそうですか。

益城：インドネシアも先ほど言ったように、1 期生が送り出し機関を立ち上げましたので、そことの契約も済んでいます。なので、インドネシアとベトナムですね。

インドネシア訪問の経緯

佐々木：最初にインドネシアに行ったのは、一期生の様子をみるためですか。

益城： 最初は EPA の説明会とか現地説明会とかです。あとうちの一期生の子と打ち合わせするためとかで行っています。はやり顔見ないと。コミュニケーションをスムーズに図るために。

ベトナムでの事業展開

佐々木：ベトナムには行かれましたか。

益城：ベトナムはうちでいろんな事業やっていますので。今はコロナの影響で行けていませんが、年に３回から４回はベトナムに行っていました。

佐々木：どんな事業を展開されているのですか。

益城：向こうの大学と提携して介護人材育成コースを立ち上げました。最初、国立大学で、介護コースを立ち上げて。そのあと短期大学と協定結んで、今二期生が学んでいます。それと向こうの病院と連携して、今後福祉施設もやりたいと思っているので。このコロナが収まれば何とかしたいと思って、一応病院と約束しています。

佐々木：グローバルに展開していますね！

益城：そうですねえ。それもこれもみんな介護人材を集めるためです。うちだけが助けられても仕方がないので。いずれ実習生たちがベトナム帰った後、働き先として施設をやりたいなあと。それで、こう人材がまわっていけばいいですね。そうすれば、お互いに win-win になれるかなあと思って。

介護実習生の受け入れの現状

佐々木：青森では、海外から介護実習生を受け入れているところは、あんまり聞いたことがないのですけど。

益城：そうですねえ。EPA も最初うちだけでした。そのあと三沢の老人ホームで入れたのですけど、それ１回きりですね。あとはどこかでも EPA で１回入れたけど、1 回きりです。なので、継続してやっているのはうちだけかと思います。

佐々木：継続できている理由とはなんですか。

益城：やっぱり職員の理解と、うちの理事長が継続は力だというので。実は一期生で送り出し機関をはじめた彼女に「頼ることはやめよう」と言ったのですが、その子がうちの理事長に「私を信じてくれてありがとう」って言ったのです。もうそれで何も言えなくなりました（笑）

ベトナムでの事業：送り出し機関

益城：ほんとは定着しないので、やめたいぐらいですが、ただベトナムはね自分たちで育てた生徒が来るので、ここはインドネシアとは違う形ができるかなと期待しています。

佐々木：ベトナムはハノイですか、それともホーチミンですか。

益城：いえいえ。フエです。

佐々木：フエにも送り出し機関があるのですね。

益城：介護の送り出し機関は一か所です。／／佐々木：一か所だけですか。／／そこと契約しています。うちで育てた子たちを、そこの送り出し機関を経由して来てもらうというルートが今できています。短大の卒業した一期生は、ほんとは今年の７月に卒業する予定だったのです。ところがコロナでの影響で、10 月までかかりました。その子たちとこの間面談して、実習生で来ることになっています。５名が今送り出し機関で入国前講習を始めたところです。

佐々木：多いですね。５名も来るのですか。

益城： 本当は 30 名以上いたのです。その中で最初は 30 名来たいって言っていたのですけど。うちだけじゃなくて、組合の別の施設にもっていうことでやっていました。ところがこのコロナの影響で、やはり親の反対にあったり、本人が「国を離れるのが怖い」とかになって。実質 14 名が手をあげまして。その中でＮ４が合格した子が 10 人もいないので。合格した中の５人が実習生として来る予定です。12 月にまた Ｎ４の試験があるので。それで合格すれば、そこからまた何人かは、来られると思います。

佐々木：Ｎ４は欲しいですね。

益城：欲しいです。うちの狙いはＮ３なのです。だからＮ４をとった子たちは向こうで塾を開いて、Ｎ３に向けて勉強してもらっています。

ベトナムとの提携の経緯

佐々木：ベトナムと提携したのはいつぐらいですか。

益城：うちの事業としては 2014 年から始まりましたね。特定技能で来てほしいっていう思いもあるのですが、なかなか十分な説明ができない。なので、実習生ということで了解してもらっています。

佐々木：結局あのベトナムの方っていうのは 2014 年から何人ぐらい受け入れたのですか。

益城：まだ 0 です。国の制度が後手、後手になってしまったので。2015 年に提携をはじめた国立大で、育てた子は EPA で東京・千葉のほうに行っています。国立大学で育てた一期生の子たちを、私たちも実習生で受け入れたかったのですけど。その時は、実習制度が延び延びになって、待っていられない子たちが EPA を通じて入ってきました。一期生の卒業生の中には、日本に来ないで、うちのベトナムの介護事業の、助手みたいな形で手伝ってくれている子もいました。

人手不足

佐々木：今後もっともっとベトナムの方とかインドネシアの方は増えていきそうですか。人手は足りていませんか。

益城：人手は全く足りないですね。制度上は３対１だけど、うちは２対１でと言いましたが、なかなかその２対１もクリアできる状況でなくなってきました。なので、コロナで失業者が増えれば、介護業界にも人が回ってこないかなあとは思っていましたけど。そうはうまくはいかないですねえ。

佐々木：働いてらっしゃる方、平均でおいくつぐらいの方が多いのですか。

益城：40 歳ぐらいですかねえ。平均すると。まあ高卒から、60 歳、うちは 65 歳まで。定年が 65 歳ですけど、平均すると 40 歳代ぐらい。まあ 10 年後は、ほぼ外国人でまわすのではないかと思います。

実習生受け入れのノウハウ

佐々木：やはりノウハウというかね、どういう風に一緒に働いてもらうかというのは、やっぱり蓄積がないとだめですね。すぐ入れるっていうわけにもいかないですからねえ。

益城：そうですね。今は介護ですけど、介護じゃない一次産業のところではけっこう実習生受け入れていますので。そういうところに、どうやって定着したかとか、そういう話は聞いています。そうするとやはり、面倒見よくといいますか、そういうところが結構重要なようです。そこの会社の人と外国人がつながると言いますか、そういう取り組みが必要なようだ、ということがわかりました。なので、今はうちもファミリー制度を設けています。今は外国人３人ですが、ここに日本人の職員を３名つけて、例えば、土曜日なんか使ってこの近くの観光地に遊びに行くとか、一緒にバーベキューするとか。また収穫の時期には、じゃがいも持って行って、「これ食べて」とか。そういうようなことをして、つながるような仕組みをつくっています。

佐々木：みなさん住んでいる所は、近くのアパートとかなんですか。

益城：みんな寮です。彼らにとって寮があるかは、一つの重要な条件という感じです。

佐々木：自分で借りるのもね、大変ですしねえ。

益城：ええ。あと家賃の問題とかありますので。あとやはり私たちが懸念するのは、アパートを借りてもいいのですけど、その子たちが、必ずしも日本の文化にそぐわないといいますか。例えば夜すごく騒ぐのです。仲間同士で。そういうことが、地域の苦情になったら、こちらとしても困るので。そういうこともあって、寮を提供しています。中には寮を出たいっていう相談を受けたこともありますけども、もうそれは絶対許さんと（笑）。

地域社会との交流

佐々木：お休みの時に青森のどこか、観光地とか行ったりとか、そういう話聞きますか。

益城：そんなに回数はないと思いますけど、自分たちなりに相談して、電車で弘前の桜を見に行ったとか。そういう話はありました。あとこの辺を自転車で、公園に行ってきたとか言っています。

佐々木：むつ市は住みやすいところだと思うのですけど。

益城：そう思いますけど、やはり憧れは都会のようです。なので、こっちで育てて、仙台に送ろうと思っています。

佐々木：今後の予定というか、あの展開とか課題とかはどうですか。

益城：今後の話としては、もう EPA はなくって主流は技能実習、特定技能になるんだと思います。EPA も決して反対はしませんけども、やはり合格までこぎつけても、定着しないっていうネックがあるので、それからいろんな条件があるので即戦力にはなかなか難しいです。実習生とか特定技能だと、本国である程度うちで育てて連れてきますから。うちのやり方を学んでから来てもらいますので、即戦力として期待できる。夜勤もできる。そういうところには、もっていきやすいと思っています。ただ、特定技能については、転職も自由になるので、他の施設に行ったりすることも自由になるので、ちょっとリスクは大きいかなと思います。なので、できればその実習生の中でも、本人の希望はあるでしょうが、国家試験に挑戦してもらう実習生を育てたいと思っています。

佐々木：そういうノウハウを持っていますからね。せっかくですので。

今後の課題

益城：あとまあ今後の課題としては、そういうところも含めたうえで他国ですね。特にミャンマーとか中国とかそういうところから、実習生のお話はいただいていますが。なかなか踏み切れないところがあるので。ベトナムやインドネシアが進んでいかないと、そういうところからの受け入れも考えざるを得ないのかなと思っています。そうしたときに、教育ですね。単純に入国前講習・入国後講習ということだけでは即戦力につながらないので。教育をどうしようかというところを考えていく必要があると思っています。

佐々木：今後はミャンマーが多くなりそうですね。

益城：そうなのです。老施協もミャンマーをすごく推しています。中国にも行ってきましたけど、けっこう年配の方が多いといいますか。あと、言ってしまえば、学歴の低い

人たちも多いので、どれぐらい教育が浸透するのかなという心配もあります。よく吟味しなきゃいけないと感じました。

佐々木：ベトナムの方は若い人が多いでね。

益城：ミャンマーもですね。老施協では推していますが、問題は衛生面が悪いことです。特に現在はコロナが流行っていますし、これからインフルエンザとかノロウイルスとか、感染者が流行ってしまうと、どうもできなくなるので、その辺がまだまだ私たちも未知数なところだなと思います。あともう一つモンゴルの話も出ています。モンゴルも寒さには強いと思うのでね（笑)。そういう心配はしませんけど、お酒のトラブルが多というのを聞いています。どうしても、こうマイナス面ばかり見えてきて。ただ、きっとミャンマーやモンゴル、中国あたりから人を受け入れる時がくると思うので、その準備をしなきゃいけないだろうと思っています。まだ手つかずですが、その辺は考えなければいけないと思っています。

フィリピン人

佐々木：フィリピンの方のお話は聞きますか。

益城：うち前に、近くでお嫁さんに来たフィリピンの方がパートで勤めてくれていました。非常に明るくて笑顔もいいですが、ちょっと病気が見つかって。それで退職せざるをえなくなりました。ビジネスと私生活は割り切って、お金分は働きますといった感じでした。「自分はもっとやるから、もっと給料を上げてくれ」っていう感じでしたけど。ちゃんと仕事はするし、「いいな」とは思っています。フィリピンにルートがないので、作ろうとも思ってなかったのですが。やはりどうしても、自分たちとルートがつながるところの国に頼りがちになるなあと思っています。

佐々木：うまくいっていればいいですが、足りなくなるとまた大変ですね。

益城：はい。そうなのです。

言葉の壁に対応

神：約３年間で受験資格をとるという流れになっている、というお話を伺いましたが、介護や医療関係は、専門用語が難しいと思うのです。そういった言葉の壁とかにはどのように対応していますか。

益城： 一日の終わりに振り返りの時間をもっています。担当する職員を配置して、例えば現場で「こういうことが困った」とか、「こういうことがあった」という時、その担当のワーカーが話を聞きます。それからフィードバックしたりしています。あと日本語の壁ということでは、国語の先生をつけました。一週間に一回勉強の日があるのですが、それは日本語の勉強と、それから介護の勉強と、試験対策とこの三本立てで割り当てられています。やはり、彼らを迎え入れるにあたって、最初はマニュアルも全部英語、日本語、ひらがなで。読み仮名ふって、利用者さんの表札にもひらがなふったり、それから炊飯ジャーの使い方も簡単なマニュアルを作ったり。ありとあらゆるところに、ひらがな表示していました。それと、利用者とのやり取りの中で困ったこと、私たちが普通の生活の中でおかしいよって思うことを、その都度フィードバックするようにしています。日本人の担当は一人決めていましたので。とにかくその子に情報

を与えたて、困ったことやわからないことがないように、やってきました。

佐々木：それはもうまさしく、この施設独自のやり方ですね。

益城：そうです。はい。結局、EPA で来ても、施設にお任せっていう感じなのですね。なので、国家試験対策のようなものを年に一回、集合研修という形ではやっていましたけど。あとはもう施設次第です。

佐々木：国からの要請や、チェックといったものはないのですか。

益城：テキストはあります。例えば、介護の専門用語とか、事例を読んでみるとか。そういうテキストは国から配布されます。でもそれだけでは決して、無理ですので。それ以外のところを、教えなきゃいけないっていう感じです。

佐々木：ほとんどまる投げですか。

益城：まあそうです。そうです。

健康面と体調管理

佐々木：皆さん健康面は大丈夫ですか。もし病気になったときは付き添いしなくてはならないですね。

益城：はい。でもうち病院もやっていますので。クリニックがあるので、何かあればクリニックに職員付き添いで行きます。熱出すといっても、３年いる間にほとんどなく、多い子でも２回ぐらいですかね。でも体が弱い子が多いのです。それで十分な医療を受けてこないので、来たら大きい病気が見つかって帰ったっていう子もいます。ベトナムの子なのですけれども EPA できて。うちで入職時の検診を受けたときに、腎臓の病気が見つかって。精密検査が必要だということで、うちは職員付き添って弘前大学まで行ったのです。検査してもらった結果、このままだと人工透析が必要になるから、国に帰るように言ったら、その子が泣いて「置いてくれ」って言うのです。実はその子が言うには、向こうで薬飲んでいたと。でも、日本でそういう薬を飲んでいると、戻されると思って薬は全部捨ててきたらしいのです。なので、治療は必要なのだけど、してない状況が数か月続いていたってことなのです。今、自分が帰ってしまうとみんなに迷惑がかかる。要は自分が日本に来るために、いろんなお金を工面して親戚中からお金を借りてきたのに。「まだ給料ももらってないし、その借金を返せないから、なんとか置いてくれ」って泣いて頼まれたのです。でも、うちとしては、置いておくわけにはいかないので、帰ることになりましたけども。送り出し機関に「なぜ日本に来る前に健康診断をやって、確認をしないのか」ということを言いました。そしたら、「いやいや、健康診断しています」と。「母国でしています」って言われました。「じゃあ、その証拠を出してください」って言ったら、要はチェックしてないのです。日本語に直ってないのです。そもそもが。ですので、向こうの健康診断を信用して丸投げといいますか。本当はもっと前に、日本に入る前に分かったことが見過ごされてしまって。結局彼女が一番の被害者だなあ、というようなことは感じました。実習生で来るにしろ、EPA で来るにしろ、すごい大金を使ってくるのですね。彼ら、彼女たちは。

方言への対応

秋元：言葉の壁にちなんでなんですけど、青森は訛りが強いと思うのです。それで普通に専門用語とか日本語覚えただけでは、やはり会話に困難な部分があると思うのですがどうですか。

益城：大変だとみんなは言っています。要は昨日まで標準語で習ってきたのに、青森に来てお年寄りの言葉がチンプンカンプンで。初めて聞く言葉がいっぱいあって、大変だとは言っています。ただ、それを楽しんでいる風はあります。

佐々木：たくましいですね。

益城：ええ。笑いに変えていますので。真似したりして。標準語と漢字と、ひらがなとカタカナと方言って。「私たちはいっぱい日本語を覚えています」と喜んでいる子もいますけど。でも、実際はほんとに大変だと思います。笑い話ですけど、入れ歯を洗う時にインドネシアの子が、お年寄りに向かってハッコって言うのです。ハッコって。手をのべて「ハッコけ、ハッコけ」って。「歯を出してください」と「今、入れ歯を洗うからハッコけって」。その様子を楽しんで、仲間同士でやっています。それからインドネシアの子が「益城部長これを知っていますか」と言って。「こさで、こさで」と言うのです。「こさで、こさで？それはインドネシア語ですか」と聞いたら、いや「日本語だ」と。「えー！『こさで』という日本語もないし、方言でも『こさで』は聞かないですよ」と言ったら、腰をさすりながら、「こさで、こさで」って。「わかりましたか」って言われました。「あ、腰が痛い」と。だから自分たちが一生懸命利用者を見て解釈して、自分たちのものにしていっている。そんな感じですね。

佐々木：利用者さんとそれなりのコミュニケーションがとれて、楽しくできているであればいいですね。

益城：利用者も大好きなのです。彼らが。

佐々木：なるほどね。ある種ユニークな感じですね。

お国柄

益城：そうですねえ。あとはお国柄というか、なんでも「はい」って言うのです。インドネシアもベトナムも「はい」って。「わかりましたか」と言うと「はい」という。例えば「明日ここに９時に来てください」というと「はい」と。わかったのだと思っても９時には来ない。「『わかりました。』って言いましたよね」って言ったら「はい」という。「じゃあ、どうして９時に来なかったんですか」って言ったら、「聞いてません」と言うのです（笑）。／／佐々木：（笑）／／そういうことは多々ありました。「なんでも『はい』って言わないでください」と言うのですが、向こうの人は「はい」って言わなきゃいけないという風に解釈しちゃうのです。けっこうあったかい国の人ですから、時間にはルーズなのですけど。事前の教育でびっしりしごかれてくるみたいです。だから、そういうの（返事がいいこと）はいいのですけど、なんにでも「はい」っていうのには困りました。

佐々木：「わかっているんだか、いないんだか」ですね。

益城：なんでも「はい」なんです。それには非常に困りました。わかんないときは聞いてって言うのですけど、それも「はい」って。「はい」以外はないですね（笑）。

4　八戸市役所

調査概要

2020 年 11 月 20 日（金）　14：30～15：30
場所：八戸市役所
聞き手：佐々木てる、秋元健元、佐藤乃愛、久保遥
話し手：春日貴子、冷水歩

聞き取りメモ

・八戸市では、総人口は減少傾向にあるが、外国人人口は増加傾向にある→外国人人口の伸びは、ほぼ技能実習生である。
・中国、ベトナム、フィリピンの人が多いが、特にベトナムが急増していて、最新のデータでは 300 人以上となっている。
・技能実習生は会社が用意した寮に住んでおり、車も持っていない人が多いので、スーパーなどで見かけることはあるが、入り交じって生活しているわけではない。
・八戸市内の企業では、北日本造船、ハチカン、ユニバース、東京ドレスなどの企業が技能実習生を受け入れている。
・八戸市では、交流促進事業として、お互いに異文化を理解するためのイベントや外国語講座を開催している。また、在住外国人支援事業として、日本語講座、相談窓口の設置、外国人対象の防災教室なども行われている。
　さらに、企業に対して技能実習生とのトラブルを未然に防ぐための取り組みとして、外国人に伝わる日本語の話し方などの講座の実施もしている。
・相談窓口では、実際に相談に来る外国人の方の相談事に対して、適切な部署や場所の問い合わせ番号を教えてあげるなどして、外国人の方と相談場所を繋いであげる役割をしている。
・コロナに関する助成金の申請などの相談は、八戸市が SNS で事前に周知したことや、技

能実習生たちが国籍別で SNS などで繋がっていることが功を奏したのか、あまり相談件数は多くなかった。
・八戸市に技能実習生が多い理由は、主に製造業や加工業などの人手不足が深刻な産業が盛んなことであると考えられる。
・人手不足が深刻な企業が多いので、コロナを理由に技能実習生を雇わないという選択肢はあまり考えられていないだろう。

八戸市の外国人住民の特徴

佐々木：あの最近の傾向と人数。国際交流などお話をお願いします。

春日：よろしくお願いいたします。まず市内在住の外国人の構成ですね。市内在住外国人の人口は近年 10 年間で 500 名くらい増加しています。これは毎年 100 人くらいずつということでご理解頂ければいいのですけれども。日本人が減っているのに対して、外国籍者は増えているという状況です。内訳を見ますと、まず国籍別でいけば、ここ 5 年の中で特に伸びたのが、やはりベトナムです。5 年前は何十人とかっていうところだったのが、今や 300 何人ということで一番多くなっています。次が中国で、その次はフィリピン。韓国。そしてインドネシア、ネパールといった順になっています。ベトナム、中国、フィリピン、インドネシアといったところは技能実習生の方々。韓国の方たちはですね、戦前からの特別永住とそのご家族の方とかになっています。在留資格別では、やはり技能実習。ここだけで 500 人という感じです。八戸の場合、特定活動の中の造船就労者という分野がありまして、技能実習が終わったあとで、一旦帰るけどもまた働けるっていう制度があります。それで特定活動が多くなっております。去年、平成 31 年の 4 月 1 日から特定技能の方が出てきました。この時の数字は 0 なのですが、今は数名特定技能の人たちも出てきております。

佐々木：特定活動は平成 29 年が 44 人だったのが、平成 30 年では 139 人、令和 1 年で 140 人ですね。一気に増えましたね。

春日：そうですね。造船就労が認められてからの伸びですね。今コロナでね、また見通しが変わってきたかもしれないですけども、特定技能 1 号の方も、今年か来年か増えてくると思うので、おそらくそのまま続けば 5 年後とかには数が多くなるのではないかなと話していました。資料の「外国人住民［技能実習生数］調査」の表では、外国人の中でも技能実習生の割合が大きくなっている。なので、人数の伸び、ほぼ技能実習生の数と理解して頂ければいいかと思います。そういったところが外国人住民の特徴です。

実習生の生活

佐々木：（技能実習生の）住んでいるところは、企業などに用意されたところですか。やはり、街の人と関わっているなどは聞かないですか。

春日：そうですね。技能実習生の方々は、寮に住まれているというのもあります。やはり八戸は製造業が多くて、どうしても工場勤務となるので。車も持っていない人たちなので、工場の近くに住んでいると思うのですけども。当然、スーパーとかで見かけるというのはありますが、日本人住民と混じっているかというと、決してそうではなく。

またコロナの中ですごく彼ら自身も、企業の方も、感染に対してすごく警戒しているっていうのもあって、あまり日本人と交流するということは、更に縁遠くなっているような印象を受けます。

佐々木：あとハチカンといった工場も実習生雇っていますね。

春日：かなりの数の企業が実習生を入れているようには見受けていますけど。まとまった数となると、北日本造船さんとかハチカンさん、あとユニバースさんとかも。

佐々木：ユニバースですか。

春日：惣菜を作る工場とか、そういったところに入っているようです。あとは、縫製ですね。私たちこの前防災の講座をやったのですけど。縫製工場＝「フィリピン人」というのは、はっきりは分からないですけど。東京ドレスさんに関しては、フィリピンのセブ島に東京ドレスさんのセブ島工場というか、セブ島支社みたいなのがあるらしくて。企業単独型で東京ドレスさんは管理しているみたいです。

イカ釣り漁船：インドネシア

佐々木：インドネシアの方は経済連携協定（EPA）ではないですか。

春日：漁業ですね。イカ釣りです。イカ釣りって、船に乗っている時間が数ヶ月単位として長いので。

佐々木：船に泊まるのですか。

春日：そうなのです。一番遠いところだと日付変更線のあたりまで行くイカ釣り船もあるのです。なので、ほんとに２～３ヶ月。さらに、戻ってきて日本海側の方とかに行ったりもするらしいのですけど。朝行って、夜帰ってではないので。まずは日本人の働き手がいないというのがイカ釣り船で。だから、早い段階で漁業実習生を受け入れることになりました。先駆者ですよね、あの人たちは。今は中型トロール船にも乗せているところがあると聞いていました。トロール船は日中操業。近海漁業になっているので、朝行って、夜帰ってくる感じです。ですがやっぱり人手不足のようです。

佐々木：インドネシアの方なのですね。

春日：はい。以前はベトナム。最初はフィリピンの人を受け入れていて、次にベトナム人になったのですけど、最終的にインドネシア人になって、もう長いですね。

カレー店の減少

佐々木：ネパール人のインドカレー屋さんは、少なくなったのではないですか。

春日：どうだろう。

冷水：以前、「ようやく帰れる」と言っていたので、帰られていると思います。

佐々木：ネパール人の数は 18 人。やっぱり若干減っている感じがしますね。パキスタンは。

春日：パキスタンは、中古車屋さんと聞きました。日本語講座の先生から。多分、あの人たちの中でビジネスモデルがあるのだと思います。パキスタン人は、結構中古車屋さんですね。

佐々木：タイは料理ですか。

春日：結婚されている方かな。

冷水：そうです。日本の漁業の方、漁師さんと結婚した方が何人かいると聞いています。
佐々木：全体的に（外国人数）はやはり増えていますね。コロナ禍で今年はちょっと増えないと思いますが。
春日：国内移動もあるので、あんまり変わんないですね。
佐々木：今後もベトナムが中止になりそうですか。
春日：また続々来るようなお話も伺っております。

国際交流事業
佐々木：せっかくですので、国際交流の取り組みをちょっと伺いたいです。
春日：私たちはまず**1．交流促進事業**というものをやっています。**（1）異文化理解事業**としてハロウィンの時期には、①**ハロウィンツアー**という子ども向けイベントをやっています。また、これに関して今年は、コロナの影響で、オンラインや写真を集めるというものに変更しました。例年は街の中心街で、子供たちがお店に寄ってお菓子をもらって歩くというのを、異文化理解をテーマにやっています。**②異文化理解イベント**なのですが、これは外国の講師の方から、言葉だったり、料理だったりを学ぶ小規模のイベントです。これを年に１回やっています。今年度はまだやってないのですが、２月くらいにベトナム人の講師を呼んでやる予定で、準備しておりました。**③在住外国人向けイベント『ジャパンデーイン八戸』**というものですが、本当は今年の７月くらいに、蕎麦で有名な南郷地区で、蕎麦打ち体験をしてもらうことで考えていました。ただコロナの影響で、そこまで行くのにバスに乗らなくてはならないし、ちょっと（開催は）難しいのかなということで、中止にしました。**④国際交流フェスタ in はちのへ**というものですが、これはうちの協会の方でやっている一番大きなイベントです。市民を対象とした国際交流のお祭りですね。外国人の人が国ごとにブース、例えばフード・ブースを作ったり、ステージでは民族衣装の披露とか音楽の披露とかがあったり、そういったイベントです。ただ、これに関しても今年度はコロナの影響で中止になっています。

（2）交流事業として外国語講座を２つから３つ例年やっております。今年はまず**①英語講座**をやりました。八戸市のわれわれの部署に９月までいた、アメリカ人の国際交流委員の女性の方が講師をしていました。**②初級中国語講座**は北日本造船の方、中国人の方１人が講師として来てもらい、あとは何人かお友達とかにも来てもらって、「サロン的な感じで出来ればいいね」というので企画しておりました。こちらもコロナで出来なくなりました。代わりに「異文化理解イベント」と「語学講座」の併催で、ベトナム語講座と料理を学ぶっていうのを、一緒にやろうかと考えています。

２．在住外国人支援事業ですが、**（1）日本語講座**をしております。こちらは今オンラインでやっています。八戸市に「NPO みちのく国際日本語センター」という団体があるので、そちらに委託しています。**（2）外国人情報提供及び外国人相談窓口の実施**ですが、まず１つ目は外国語での情報提供です。「リビングガイド」というのを八戸に転入してきた外国人の方々に差し上げています。中身は生活情報で、英語、中国語、日本語で書かれています。あと「生活相談業務」というのは、私たちの事務所に相談窓口がありまして、何か問い合わせがあった時には、中国語と日本語で対応出来るよ

うになっています。国際交流委員が操れる言語です。**(3)国際交流ボランティアバンクの運営**ですが、通訳ができる人だったり、ホームステイを受け入れる人だったり、外国語でのガイドができる人だったりを登録して、外部からの要請に応じて派遣しています。**(4)外国人のための防災教室**というのですが、今年は東京ドレスのフィリピンの方たちとやりました。去年までは外国人の方だけを集めて、「日本で起きる災害ってこんなものだよ」、「地震が来たら外に飛び出しちゃダメだよ」、「津波は怖いよ、逃げなきゃダメだよ」とか、やっていたのですが、今年度はより実用的なものということで、東京ドレスの人が暮らしている地区に住む町内会の人にも一緒に参加してもらって、一緒に防災講座を受けてもらいました。**(5)外国人協力委員登録事業**は、国際交流協会の事業に参加してもらったり、私たちの手伝いをしてもらったりしています。会費なしの会員になってもらうのがこの外国人協力委員制度です。個人 30 人、団体３名の方々に入ってもらっています。

３．通訳・ガイド支援部隊。**(1)米軍三沢基地新規赴任者八戸ツアー**ですが、米軍三沢基地の方が主催しています。新しく三沢基地に赴任してきた人が、ここの地域に慣れるためのオリエンテーションを米軍がやっています。それで毎週金曜日に八戸に来るのですが、そこにうちの英語ガイドさんたちが対応しています。八戸では、八食センターと櫛引八幡宮に行っているのですが、今年は櫛引八幡宮の外での従事だけとなっています。米軍の方は八食センターにも行っています。**(2)観光地と英語ガイド**ということで、八戸市内にある観光地、種差海岸とか市の施設、リサイクルプラザとか博物館といったところに要請があれば、ボランティアを派遣して英語ガイドを行います。これに付随して、内部研修を行ったりしています。

４．調査広報事業では、**(1) 機関紙「りんぐりんぐ」**を発行しています。年２回 3000 部、市内で配っています。**(2)ホームページ等による広報**では、ホームページと Facebook をやっています。そちらの方で協会の PR をしております。５．友好都市交流事業では中国の甘粛省蘭州市という、中国のホントに、ど真ん中にある砂漠の中の都市と長年交流しています。そこや、６．姉妹都市はアメリカ合衆国のワシントン州シアトルの近くにあるフェデラルウェイ市というところと、姉妹都市提携しています。そことも交流をしていて、何かあればお迎えするとか、そういったことのために提携しています。もちろん現在は、コロナなのでそういったことはございません。

佐々木：今年でも本当にコロナの影響でイベントは軒並み中止ですね

春日：そうですね。

佐々木：来年どうですか。出来そうですか。

春日：そこが悩ましいところで、大きいのは難しいかな。

冷水：イベントは出来ないけど、なんかちょっと違う形でやりたいです。交流は出来ないけども、在住外国人の支援をしよう的なところをメインに、あの違う形のイベント組み立てをして、行っています。

佐々木：ハロウィンなんかはオンラインでやったのですか。

春日：そうなのです。Instagram を活用して、ハロウィンのお子さんたちの写真とかを出してもらって、良いコスチュームとかで投稿してくれた人には、お菓子を後から送って

あげています。いつもお子さんたちに楽しんでもらうイベントとしてやっているので、うちの委員の人たちが、ぜひコロナでも何かやりたいといっています。

国際交流フェスタ

冷水：国際交流フェスタですが、「はっち（八戸ポータルミュージアム）」が出来た年に始まったと聞いています。

佐々木：どれくらいの数の出店があるのですか。

春日：４つか５つですね。国別では４つぐらいです。あとは八戸学院大ですね。言語とかに力を入れている大学もあるので。留学相談デスクとか設けたりしています。各国のブースも３つとかあります。私たちにとっては大きいイベントです。大学祭ほどはないですけども。

佐々木：各国となると、アメリカとかですか。

春日：１つは ALT ブースといって英語圏。あとは、多文化共生ということを意識するので、在住外国人の国籍別で多い、ベトナム、中国、フィリピンのブースを前回は設けていました。

佐々木：なんか文化紹介をやるのですか。

春日：そうですね。例えば、ちょっとしたお菓子とかをカゴに入れておきながら、一緒にゲームをしたり、簡単な言葉、「私の名前はなんとかです」とかいうのを、そこの国の言葉で言い方を教えて貰ったり。ブースの名前が「外国人とのおしゃべりコーナー」になっていて、ちょっとした会話から文化の一端を覚えてもらい、国際交流の楽しみを感じてもらうという趣旨でやっています。

冷水：八戸国際交流協会の Facebook とかで過去の映像も見られるので、ぜひ見ていただけるといいですね。

佐々木：毎年９月にやるのですか？

冷水：そうですね。例年９月にやっていますね。

広報誌

佐々木：「りんぐりんぐ」はまだ発行しているのですね。

春日：そうですね。なんでもそうだと思うのですが、市民活動は核になる人のやる気にかかっています。調査広報部会長さんが、機関誌のことを考えてくれています。毎回ネタを、特集記事を探してきてくれています。（今後は）後任を探すのが課題になるかもしれません。

春日：私たち国際交流協会は、市の援助受けています。市役所の市民連携推進課の中に事務局が置かれています。市役所内では一応、独立組織です。任意団体なので。

冷水：県国際交流協会のような地域国際化協会にはなっていません。

佐々木：日本語教育を行っている NGO、NPO の人たちと連携、情報交換はあるのですか。

春日：うちは日本語講座を、NPO 法人みちのく日本語教育センターの方に委託していますし、彼らはうちの会員でもあります。私たちは結局、市役所に事務所があるので、実は外国人との接点はそんなに多くないのです。彼らの状況は、日本語講座なり、受託者の方からの情報によるところが大きくて、この方たちとは色んなことで協力関係に

あります。

相談内容

秋元：外国人の相談窓口の件なのですが、生活相談ってどういった内容のものが過去にありましたか。

冷水：最近あったのは、「税金滞納している」といった類のものです。あとは「もっと日本にいたいのだけれども、ビザが切れるのでどうすればいいか」とかっていうものがありました。相談があっても、われわれのところでは解決できないことがあるので、適切な部署に繋ぐっていうのが役割になるのですけど。税金の方は、分割納付にする方法とかを提供したり、ビザの関係は国（法務局）の連絡先を教えて、「こちらの方に問い合わせてください」というような話をしました。

春日：あと、東京に出入国管理難民法が改正になった流れで出来た FRESC（外国人在留支援センター・フレスク）という機関があります。四谷にあるのですが。在留資格だったり、生活相談だったり、法務省が主導して、あと人権擁護だったりとか、外国人の支援をする機関が一気に集まっています。今年の７月にできました。

佐々木：あ、今年の７月ですか。

春日：そうなのです。そこが在留資格の相談などを、一括して受け付けてくれるので、そこを紹介したりします。コロナの相談窓口もあります。

冷水：個別に対応してくれます。

佐々木：新型コロナ対策としての助成金や給付金の相談は来ませんでしたか。

冷水：われわれの方では、SNS、ホームページ等で事前に「申請してください」と拡散、周知したためか、あまり個別の問い合わせはなかったです。あとは国籍別に Facebook でまとまって繋がっていたり、それぞれ国のチャットがあるようなので、その辺で情報を得た人は、ちゃんと申請したのかなと思います。

八戸市の国際交流

佐々木：八戸は、青森市や弘前市よりも国際交流関係に力を入れている印象ですが、いかがですか。

春日：やはり、在留外国人は八戸が一番多いので。

冷水：旅行者の人数は、在留外国人統計にはカウントされてないので、在留者だとやはり八戸が一番多いですね。

佐々木：太平洋側で来やすいというのもあると思いますが。

春日：それもありますが、やはり製造業の街なので。いずれにせよ、漁業･加工系も全部今技能実習生ですので。ベトナムの方たちは加工系が多いですね。

佐々木：ここ５年くらいで増えたという感じですか。

春日：そうですね。今まで何回か技能実習生の制度の変更、改正があって、おそらくその都度、技能実習生を受け入れやすくなってきているはずなのですよ。それで増えたのではないかと思っています。

佐々木：なるほど。「特定技能」の在留資格ができて、なにか変化はありましたか。

春日：まだ始まって１年半なので。こちらもずっといつ出るか、いつ出るかと思っていま

したが、今年のたしか７月か８月に一人出てました。それで「ついに八戸でも特定技能が」と思いました。だんだん八戸市でも増えるのだと。

冷水：この時点で 11 人です。

春日：全部ベトナム人です。だんだんに特定技能は増えると思います。

冷水：０から 11 人になっているので、多分これから増えてくるのでしょうね。

春日：やはり漁業は人手不足というところがすごくあると感じています。もう外国人を雇う流れは、コロナでも恐らく変わらないのではないかという風には感じています。

佐々木：製造･加工関係は、もう全体的に人手が足りないですね。

春日：そうですね。

佐々木：そうするとやはり流れ作業といった、単純作業は海外からですね。ベトナム語を勉強しておくと、優遇されそうですね。

冷水：たしかに管理部門の方で優遇されると思います。

佐々木：今後の青森は人口減少が進むので、さらに外国からの人は増えそうですね。

春日：そうですね。「産業の下支えしていくうえで、外国人を登用するのは欠かせないかな」という印象を持っています。

トラブル

佐々木：トラブルは何か聞いていますか。

春日：７月にリビングガイド（生活情報誌）を渡すために、日本語が堪能な外国人の方 3 名来ていただいたのですが、その時に、ベトナムの方だったのですが、「ちょっとしたトラブルはある」と言っていました。ただそれは文化の違いを知らない、お互いが知らないことで生まれているようなトラブルが多くて。「日本の方にもベトナムの文化を知っていただきたい」ということを話していました。あとは日本語講座の先生の方が話していたのですが。日本人の（実習生の）担当者が、「日本語がよく分かってないから、言葉を教えてあげてよ」と言われるらしいのですが、話してみるとその外国人の人は結構理解していると。なので、「おそらく外国人に通じるような日本語が話されてないのでは」、という話はききました。

佐々木：なるほど。

春日：そういったことがあって、昨今全国的な事件とかいろいろありますけれども、八戸ではできるだけ、そういったトラブルが生まれないように、今度コミュニケーション講座を行います。文化の違いを知っていただき、また外国人に伝わりやすい日本語の話し方を学んでいただく、企業の向けのものを企画しています。

冷水：企業の担当者向けです。これも初めての取り組みです。やはり新型コロナで様々なイベントができない中、またトラブルが全国的にあることも受けて、それを未然に防ぐための取り組みとしてやろうと思っています。

佐々木：大きい企業であれば通訳がいますが、農村とか漁業関係など個別になるとたいへんですからね。津軽弁、南部弁といった方言の問題もありますし。

冷水：そうですね。優しい日本語をまず学ぶ講座と、今回ベトナム編でやるのですが、あとベトナムの文化学ぶという、二本立てでやります。

佐々木：その他、何かトラブルは聞きますか

冷水：そうですね。新型コロナの影響で自粛生活が進み、その間は喧嘩が増えたとか、ち

ょっと精神的に病んじゃった子がいるとか、そういう話を聞いた時にありました。

八戸市の外国人子弟

佐々木：公立学校で外国人子弟が増えているなどの話は聞いていませんか。

春日：先程話した日本語講座委託しているところの人たちは、有志で子ども向けの対応もしています。八戸市では教育委員会の方で日本語教育支援事業をやっていて、そういう外国人のお子さんたち、児童生徒が入ってきて、どうやら日本語のサポートが必要だとなった時にその人たちが、学校の方の授業のサポートに入っています。取り出し授業で。また、「寄り添いで」など、その子に合わせたサポートをしているように聞いています。数的には小中学校で 20 足らずだと聞いていますね。市内全部で。

佐々木：今後、本格的に増えるかもしれない。そうするとちょっと大変かもしれないですね。

春日：そうですね。教えている側の方は、ギリギリのところでやっていると聞いています。けれども、まだ数が少ないこともあって、なかなか建設的に進められないようです。

佐々木：一気に増えてしまえば、それはそれでもう予算つけて、しっかりやるしかないという話になるだろうけど。日本語学校経営できるくらいの人数がいればですね。

相互理解にむけて

佐藤：私の母の会社にもベトナムの技能実習生が来て、夜にすごく騒いだりして、近隣の人から苦情が来た反面、仕事に関してはすごく真面目に取り組んでいると聞きました。そういったこともあって、文化の違いを理解出来れば問題ないのかなと思いました。

春日：そうですね。一つは若い人だというのがあると思うのです。あのベトナム人だからじゃなくて、若いと盛り上がりたいとか、あとベトナムの人はおしゃべり好き、社交的らしいのです。なので、そういうところを分かってもらえるようになっていけば。日本の方も心の壁というか、外国人に対して、まだ（壁が）あると思うので。特に年配の方は。私たち国際交流の方で、そういう障壁を取れるような働きかけをしていければいいかなと思っています。

久保：日本と外国という、全く違う場所から来る人たちなので、言葉や心の壁もあると思うのですが、コミュニケーションが取れるようになれば、もっともっと交流が増えて、もっと楽しめるのではないか、イベントもたくさん増えるのではないかなと思いました。

春日：少し前までは、特に大都市ではないところでは、外国人の数はそんなに多くなかったので、国際交流のイベントをやっても、国際交流が好きな人だけが集まるのです。でも、今はもう外国人の数が増えてきているので、好きとか嫌いとかじゃなくて集まります。近くに外国人がいる状況が地方都市でも生まれてきているので、やはり歩み寄りというか、お互いにここで一緒に暮らしていく者だという考えが、すごく大事なのかなと思っています。

多文化共生を考える

秋元：先ほどのベトナム人と日本人の文化の違いでトラブルがあるという話ですが、ベトナムの以外でも中国、フィリピン、韓国の人もいますが、やはりトラブルはあるので

すか。

春日：そうですね。中国の人のケースですが、その人はおそらく来たばかりで、良かれと思って「野焼き」をやったのですが日本では良くなかったとか、そういう笑えるようなトラブルを聞いたことがあります。やはり知らないこととか、習慣の違いとかが、結果としてトラブルになってしまったということがあります。例えば、ゴミの捨て方とかも日本だと分別が普通ですけども、それは世界どこでもではないので。それがトラブルにならないようにするのが、多文化共生の取り組みなのかなと思っています。私たちも実は国際交流の担当ではあるのですが、多文化共生をしてくのは各分野なのです。災害だったり、医療だったり、福祉だったり。それぞれが外国人を受け入れるようになっていくのが多文化共生なので。１つ１つの分野の人にそう思ってもらって、変えてもらうことをしていかなければならないのです。その点は苦労しています。

5　三沢市国際交流教育センター

日時：2020 年 11 月 20 日（金）　16：30～17：00
場所：三沢国際交流教育センター
聞き手：佐々木てる、佐藤乃愛、秋元健元、久保遥
話し手：根岸貴之、平野真夕、栗山千春

概要

在留外国人について
- 令和 2 年 3 月の時点で一番多い国はベトナムでそのほとんどが技能実習生である。
- フィリピンや韓国の在留外国人も多い。韓国人に関しては永住者が多い。
- 企業側のケアが厚い。
- 割とトラブルが少ない。

教育
- 週一で小学校一年生から英語の授業をする。（平成 18 年から）
- 異文化を伝えることをしている。→今年はスペインの人が自国の文化を教えた。

外国人向け
- 教育委員会が、日本語の習得にあたり支援が必要な児童に対するサポートをしている。

ごみのトラブル
- 以前はあった
- ゴミ回収の紙（チラシ？）は基地の区域外に住んでいる外国人にも理解できるように英訳されている。

三沢市の在留外国人数

佐々木：まずは外国人の数からお願いします。

平野：三沢市に居住する外国人は令和２年の３月末現在で、643 人になっています。これはあくまで住民登録をしている外国人の数で、米軍基地の軍人、軍属の数は含まれておりません。ご存知のとおり彼らは日米地位協定の対象者なので、三沢にいながらも住民登録がないという形になっています。登録外国人の内訳としていちばん多いのがベトナムになります。三沢市はアメリカ人、約 8000 人が基地の関係者なのですが、その人数を抜いた 643 人という数字だけを見ても、外国人数は県内で４番目の多さになっています。八戸、青森、弘前の次に三沢市が多く受け入れています。国籍の方も平成 10 年にこの統計を取り始めた頃は、10 ヶ国程度だったのですけれども、今ではそれよりも多い、様々な国から来日して、三沢市にお住いになっています。最近だと、おいらせ町であったり六戸町の小松ケ丘であったり、三沢市と隣接した市町村にお住いになっている外国人の方も沢山いらっしゃいます。

ベトナム人実習生について

佐々木：ベトナムの方が随分増えましたね（266 人）。

平野：そうですね。多くが技能実習生になります。ベトナムの方の多くは三沢市内の企業さんで働いています。例えば、精密機械関係ですと「A 社」とか、あとは畜産、鶏肉等の加工になります。「B 社」といって、八戸に本社があるのですが、三沢市北部の細谷という地域がありまして、そちらの方にある鶏肉の工場（処理、パッケージ工場）で雇われています。「A 社」は工業系の会社で、沢山の外国人がお勤めになっています。彼らは日本に来る前に、ベトナムで研修を受けてきます。海外の方は学歴もきちんとした方が多く、大卒、短大卒で、ある程度日本語の能力があります。その中で採用試験をパスして、さらに日本に来てからも半年近く日本の習慣とか言葉を学んで、それから三沢市に入ってこられると聞いています。そのためトラブルや、相談というのはこちらの方には寄せられておりません。会社さんの方でも、ケアしてくれているようです。例えば、バスでイオンにお買い物に連れて行ったり、地域の方とよさこいを楽しまれたりしています。中には会社が自転車を１人１台与えて、「好きなこところに、好きな買い物に行きなさいよ」というところもあります。ですので、割と彼らは自立しているというか、普通に我々と何も変わらない生活をしています。

佐々木：凄いですね。ここまで自由にされているのはあまり聞かないですね。

平野：前に「途中で逃げ出すというか、そういう方はないのですか」と聞いたことがあります。ベトナム人にはそれなりのコミュニティがあって、例えば三沢の工場からちょっと姿が見えなくなっても、そのコミュニティの中で例えば八戸市にいたりとかするそうです。「この辺りだと、都会の方とはちょっと違って行動範囲も限られるので」というふうにお話していました。

佐々木：前に伺った時にはベトナムの方はこんなにいなかったですね。

平野：そうですね。数年前まではやはり中国の方が多かったのです。農業関係です。三沢市内にも水耕農場があります。レタスとか、ベビーリーフとか。よくスーパーのレタスの辺りにこう色んな葉っぱが売っていますよね、サラダで使えるような。そういったものを栽培している大きな農場がありまして。そちらで中国の方は働いています。
佐々木：みんな何人かまとめていらっしゃるのですか。
平野：そうです。そちらも技能実習生だと思われます。

その他の外国籍者

佐々木：フィリピンの方も多いようですが。
平野：そうですねフィリピンの方は、まとまった数の方いらっしゃります。以前は飲食店にお勤めの方が多かったのですが、最近はそのあと結婚されてお住いになっている方、例えば、「日本人の配偶者等」といった在留資格もみられます。フィリピンの方は在留資格もおそらく多岐にわたっていると思います。「特定技能」「実習生」「配偶者等」というところですかね。飲食店にお勤めの方はだいぶ減ってきていると思われます。三沢市には、インドカレーのお店とかありますのでインド人や、ネパール、パキスタンの方もいらしてます。三沢市内は結構多国籍のレストランが多いのです。タイ料理のお店、インド、アメリカンフード。和食以外にも中華はもちろんですが、そういったところが多いです。韓国系も昔から多いです。
佐々木：韓国人の方がちょっと増えていますね。
平野：微増という感じですけど、多くは永住者、特別永住者がほとんどです。韓国の教会もありますので、中には布教活動ということでいらしている方もおられます。でも、そこはわずかですね。教会の布教活動でくる方はアメリカ人も同じですが、こちらの方はやはり、日本人の配偶者であったり、教師、ALT の先生だったり様々です。元々は米軍人だったが、リタイアした方とか、そういった方もいます。

コロナ下での米軍基地の方針

平野：基地のメインゲートの周辺は、アメリカンバーとか多国籍な料理店が多いのですけど、今のコロナの影響で、米軍人は夜９時までには食べ終わることになっています。また一回の食事時間は２時間となっています。「ターゲットミール」と呼ばれていて、この間までは「１時間以内に食べ終わりなさい」とかでした。バーとカラオケは未だ「行ってはいけません」となっています。映画館は OK になったのかな。基地の方がずっと厳しいのです。ニュースでよく、「基地で感染者が出た」と言われますが、それは（もともと）隔離中の方です。皆さん日本に入ってきて二週間は隔離です。その後、二週間たって、最終検査とかでポジティブ、陽性反応がでたとなってくると、家族とかが濃厚接触者になりますので、そこで検査をしたらやっぱり陽性だったとかです。そういうことで、基地の外にも出られないですし、基地の中でもさらに隔離されているような状況です。なので、元々基地にお住いになっている方の中で感染者は出ていないのが現状です。
佐々木：基地クラスターになると大変ですからね。
平野：そうなのです。沖縄の例があるので、やはりタクシーで移動されたりするとみなさ

ん不安に思われるので。三沢市内は特別休校などもなく、子どもたちも普通に生活できている状況です。

第一次産業の外国人労働者

佐々木：第一次産業、農業とか漁業関係の実習生が増えているイメージはありますか。

平野：減っていると思います。一次産業の実習生は一時期より減っている。「B 社」は食肉系の工場なので。一次とも二次とも言えますが。

佐々木：農家の方でお手伝いみたいなのはあまりないですか。

平野：あまりないですね。三沢市内はニンニクを作ったり、根菜を作っている農家が多いですね。お米が作りにくいエリアなので。だけどあまり実習生を雇っている話は聞かないです。

根岸：聞かないですね。以前、確か中国の方とか、団体でいらっしゃったと聞きましたが。

平野：たまにホームステイじゃないですけど、「一人受けいれています」とか、そういった感じのことは聞きますが、企業のような形でまとまった数がいるという情報は入ってきてないです。

三沢市の多文化共生

平野：もともと三沢市というのは、ミス・ビードル号や米軍基地といったように外国との関係が深いのです。明治時代に、広沢安任（ひろさわやすとう）いう人がいまして。大久保利通とかの仲間の方だったのですが。その方がイギリス人二人を雇用して、北部のエリアで西洋牧場を開設したのです（日本初の民間洋式牧場)。なので、外国人が身近というか、外国人が村の中にいる環境になっておりました。それが明治維新の直後です。昭和に入って昭和６（1931）年に「太平洋を無着陸で横断した人にお金をあげます」と新聞社が懸賞をかけました。アメリカから日本に向けて太平洋上を偏西風が吹いているのですが、私たちは「やませ」と呼びます。飛行機は向かい風に向かって飛んでいきますので。そうじゃないと飛べないのですね。風の力を受けて飛んでいくものなので。それで結局、日本からアメリカに飛んだ方が太平洋を早く飛べると。なおかつ、この北日本からアメリカに飛んだ方が、距離が短くて済むということで、三沢の土地が選ばれて、淋代海岸（さびしろかいがん）の広く伸びた砂浜が（出発点に）選ばれて。ミス・ビードル号が 10 月に太平洋の無着陸横断飛行に成功したということです。来年で 90 周年になります。

佐々木：90 年前ですか。

平野：はい、なのでやはり、三沢市はアメリカとの歴史的なつながりがとても深いのです。

佐々木：姉妹都市交流も続いていますね。

平野：そうですね。姉妹都市交流も、無着陸横断飛行の記念の年である昭和 56 年にアメリカワシントン州ウェナッチ市と締結し、毎年使節団を送っています。今年はコロナの影響で出来ませんでしたけど。その後の調べでは、隣の東ウェナッチという街が実は着陸地点だということがわかり､そちらの方とも 2001 年に姉妹都市を締結しています。今は３者による交流が続いています。

佐々木：今年はさすがに色々と事業も中止ですね

平野：実際に相互交流、行ったり来たりができないんです。三沢市は中学生も派遣しているのですが。中学生約 10 名と、あと夏にはウェナッチバレーにある短大の方に短期留学という形で、高校生も 16 名ほど派遣していたのですけど。今年は全部中止です。

文化交流の背景

佐々木：三沢は文化交流がうまくいっている事例だと思うのですが、その秘訣はなんだと思いますか。

平野：私は三沢市の出身なので、生まれた時から当たり前のようにあったものですから。そのように（文化交流が上手くいっているとか）はあんまり思って（意識して）いませんでした。大人になってからですね。他のエリアの方に「珍しいんだよ」っていうふうに言っていただけるのですけど。お渡しした資料の 4 ページから、ずっとこの三沢市で行っているイベント、交流事業っていうのがあります。ほんとに一年を通じてたくさんの事業をやっていまして。ただお祭り、イベント的なものだけではなくて、基地の中の生活を知ってもらうフレンドシップ・ツアーというバス・ツアーであったり。さらにまた、ニュースポーツ。三沢市は「共生社会ホストタウン」ということで、東京パラリンピックのカナダチームを受け入れています。車椅子ラグビーのホストタウンでもありますので。事前キャンプですね。そういったカナダチームの受け入れなど、ほんとに市民の方のボランティアにも支えてもらっています。あとは県と共同で、「青森グローバルアカデミー」という人材育成セミナー。青森公立大の学生さんも今年参加していただいているのですけれども。今年は米軍基地に入ることは出来ないのですが。三沢市の特色を生かしたプログラムっていうことで、「グローバルに活躍する、世界でビジネスをすることはどういうことか」とか、「ローカルの魅力をもう一度発見する」とか。ローカルにいながらグローバルな視点で活躍できるグローカルな人材の育成ということで、取り組んでいます。あとは教育委員会の部分になってきますが、学校教育の方でも小学校一年生の方から英語は必ず週に 1 度勉強しています。／／佐々木：小学校一年生からですか！／／今でこそもう、小学校 3 年生から、必修になったのですけど。三沢市の場合は平成 18 年から「特別英語特区」ということで英語教育に取り組んでいます。毎週一回基地のアメリカ人がボランティア講師で英語の授業に来てくれます。あとは「異文化理解講座」ということで年に 1～2 回、アメリカとはまた別の国の方、今年はスペインなんですけど、の方が小学校に赴いて子ども達にその国の文化を伝える授業などをしてくれています。

佐々木：学校教育関係で例えばスペインの人を呼ぼうとか、セッティングはどちらでやっているのですか。

栗山：小中学校の教育課程に関しては、市の教育委員会の管轄になっています。学校教育課というところが担当しているのですが、担当の方がこちらの国際交流協会に相談に来て「誰かいませんか」と。例えばアメリカ人、軍人のご家族とか、スペイン人の場合もあるし、タイ人の時もあるし。そういうことで、こちらは様々な人材を把握しているので紹介したりしていますね。

佐々木：ここは情報がいろいろ集約する拠点みたいな感じですね。

平野：割とそういう形になっています。

佐々木：学校とか最近外国人子弟も増えている気もするのですが、その対応などはなにか伺った事ありますか。

平野：実は三沢基地のアメリカ人の子どもが、たまに日本の学校に通うということがあるのです。親御さんが日本にいるうちに体験させてあげたいということで。ただ条件としては、やはり日本語が理解出来るということです。お子さんもですが、お母さん、お父さんのどちらかが、やはり多少日本語ができないといけないですね。あと、もともとアメリカで暮らしていて、お母さんが日本人でお父さんが赴任で日本に来てという場合もあります。それで日本の学校に子どもを入れようかとなった時に、どうしても日本語が多少遅れているので、そういった支援も教育委員会の方で行っています。

日本語教室の提供

佐々木：三沢市として日本語教室など提供していますか。

平野：三沢市としては、一応国際交流協会の中に日本語クラスがあって、そこに補助金を出しています。以前は委託という形で開設していたのですが、それだと委託された業務に縛られて自由度がすくなくなってしまうことがあったので、今は補助金という形で市が支援して、国際交流協会が自発的に運営をしております。

佐々木： NPO とか NGO というわけではないのですね。

平野:ではないのです。ただ国際交流協会自体は NPO としての法人格は取っていませんが、NPO ですので。あとは日米友好クラブっていうところがあります。特段、日本語教室を行っている訳ではないですが、日本人とアメリカ人が週に 1 回、サロン、カフェのような形でおしゃべりを楽しんだりしています。

佐々木：相変わらず米軍基地とは上手く付き合えているのですね。

平野：そうですね。基地内大学の就学支援も行っています。令和２年は 14 名の日本人が米軍基地内の大学に入学しました。ただ、今はバーチャルクラスということで、学校の校舎に入る許可は得られないですが。今年は 18 歳から 70 歳代まで入りました。

ゴミ・トラブルの解消

秋元：言葉の壁とか、異文化の違いによるトラブル、例えばゴミの捨て方とか習慣による違いから起こることは三沢市でもあるのですか。

平野：（ゴミ問題は）以前ありました。三沢市はゴミ収集を４つのエリアに分けて行っているのですが、収集日程表を全部英訳しました。基地内じゃないところに住んでいる方もいるのです。「オフベース」と私たちは呼ぶのですけど。基地の外に住んでいる人達が、自分の住んでいる地域でゴミを出す曜日とか、分別の方法を理解できるように、イラスト入りで、英語で作っています。その他、軍人さんではなくて、在住外国人の方たちは、ある程度日本語をわかってきてくれているので、ご家族に聞いたり会社の方の指導がちゃんと入っていて、最近はそういったトラブルっていうのはだいぶ少ないですね。以前はあったのです、三沢市も同様に。

6　有限会社　アルパジョン

調査概要

調査日：2020 年 10 月 31 日（土）
時　間：13：00～14：30
場　所：八戸　卸センター事務所
参加者：佐々木てる　神なぎさ
前川美穂香　亀岡紗衣
語り手：アルパジョン社長
　　松坂　和治　氏

聞き取りメモ

　チーズケーキ「朝の八甲田」で全国的に有名な洋菓子店、アルパジョン。社長の松坂氏は常に新しい取り組みに積極的である。今回は青森、日本全国のみならず、世界展開している現在の取り組みについて語ってもらった。

・台湾でのネットショッピング
・世界各国とのネットワークの構築
・世界の常識と日本の常識を考える。

最近の海外への展開：台湾でのテレビショッピングとネット販売

佐々木：最近の海外での販売についてお話しお願いします。

松坂：まず直近の海外のビジネスの話をしますと、来月（2020 年）の 11 月 3 日に台湾でテレビショッピングを放送します。このコロナの中で、どうやって海外の方が商品を買えるようにしたらよいか考えて。テレビショッピングの番組を、生で、Zoom Live をやります。テレビ画面が二つに分かれていて、一つは台湾のスタジオ、もう一つは、うちの店舗の方です。そこで商品説明とか、実際うちの店舗の中で、スタッフの女の子たちが商品を食べたりして。そういうのを日本と台湾同時に、二面中継でやります。そうやって台湾の皆様に販売するとか、それが、このコロナになってからの新たな取り組みですね。

松坂：その他 7 月には、アメリカのサンフランシスコのネット販売で、うちの商品を取り扱いたいと。サンフランシスコはアメリカの中では富裕層の方が多くて。そこの物流を、JFC というキッコーマンさん系列の会社が請け負っているのです。僕の友達がシアトルにいるのですけど、「シアトルの宇和島屋にもアルパジョンの商品並んでいます」って写メが来たのです（笑）。そこで、うちもネット販売で取り扱ってみようと。ネット販売は、大体（流通の）仕組みっていうのが決まっているのです。担当者とか、ネットニュースとか、様々な情報が。

松坂：もともとネット販売を考えるきっかけとなったのは、新型コロナで大打撃を受けたのですが、6 月に楽天とか、自社のホームページで、販売が爆発的に進んだことです。5 月の連休で全部のショップが閉鎖になって商品が余ったのです。それで急に店じまいになって、公共的な場所の店舗が全部閉鎖になりました。それで、6 月に「助けてください」っていうタイトルで、こういう事情で商品が余って、これを通常いくらの商品をいくらで売ると情報を出したのです。そしたら、それを SNS にあげる方がいて、ネットのランキングのトップに上がったりしまして。そういう風に皆さんに応援していただいたのがきっかけです。なので、世の中がこのコロナになって、マスクをしたり、自宅でのテレワークとか様々色んな形に世界中が変わって、その中でもみんなが、新しい仕組みの中でどうやって生活してくかっていうことを、今模索しているのだと思います。それが、日本だけではなくて、世界中がそうなっているのです。

ネットでの発信を考える

松坂：話ちょっと僕飛びますけど。今人気の映画あるじゃないですか。漫画の、、、刃。

佐々木：「鬼滅の刃」ですね。

松坂：そう、それ。結局日本のアニメって、世界の中でも、すごく認められていますね。それで、僕も、なんとなく見ているのですけど（笑）。

佐々木：そうなのですか！

松坂：「なんでこんなに人々が熱狂しているのだろう。なぜこれが今、コロナ関係なくして、みんなの注目を浴びているんだろう」と思ってみているのです。それで思ったのが、やっぱりストーリーの中に、色んなタイプの人間の性格や、性質。あと人間関係の関わり方。そういったものが、あの中に入っていますよね。だから、漫画なのだけど、その内容は、世の中、全体の中で、優しさを重んじている人もいれば、競争の中で何

かを犠牲にしても勝たなければって向かっている人もいれば、でもやっぱり、大切なのは家族っていう人もいて。それが漫画の中には、ストーリーとして、ちゃんと描かれているのですよね。それと同じように、僕も商品を作って「世界の中で、人をこう、幸せにしたい」とか考えるわけです。そして、その商品が世界中に届く時代になったのですね。Zoom 会議もそうだし。昭和とか平成にはなかった、新しいことですね。わざわざ海外に行かなくても、ネットワークがあれば情報が入るのです。

松坂：ということは、やっぱりこのコロナがあって、みんなが変わらなきゃいけないのですよね。だから、マイクロソフトを立ち上げたビルゲイツさんも、最初は「なんだこんなもの」って思われたかもしれないけど。その仕組みが便利で、全世界に影響を与えている。例えばこれまでは、テレビとか映画見て「この映画いいな」とか、「この番組いいな」とか、俳優とか女優の人がどう活躍しているのか見ると、それに対して「この人素敵だな」とか一方通行だったわけです。ところがネット環境が発達したので、その女優とか俳優、男優さんじゃなくて、一人一人が、その逆の立場になれるのだよね。自分がどういうパフォーマンスして、どういう考え方をもって世界に発信して、それを見た人が共感して。だから、この「朝の八甲田チーズケーキ」がヒットした原因っていうのは、やっぱり芸能界の森公美子さんとの出会いもあったのですけど。でも、これからもしかすると、うちの社員の中とか、うちの商品を食べたお客様の中でとか、いま有名じゃない人でも影響力を持つことがあり得るわけですよね。

佐々木：それこそインフルエンサーとして、ですね。

松坂：そうそう、そうですよね。だから、そのきっかけになるのはやっぱり、今の映画のように、人に対しての思いやりとか、優しさとかだったり。なにかそういうのが「いいな」と思えば、みんな素直に「いいな」って広めてくれるのですよね。

サンタクロース車

松坂：今年四年目になるのですけど、“サンタクロースの車”っていうのをやっているのですよ。

佐々木：へえ～！

松坂：アルパジョン・サンタ号といってですね、ちょうど EXILE 事務所とか、ジャニーズ事務所とかが使っていたトラックを、僕の取引先のお客様で、そのトラックを買ってきた方がいらっしゃって。その方が、「アルパジョンの車にこれしたい」と。それで僕がこのトラック見たときに、「いや僕もそうだったのですよ」って。というのも一号店を出店した時にイメージしたのは、小さい子供から、おじいちゃんおばあちゃんまでみんなが、サンタがいるケーキ屋さんだったのです。それで、オープン当時のクリスマスの子供たちのプレゼントは、「良い子にしていたらサンタクロースが来るんだよ」っていう、物語をつけたクリスマスのパンフレットだったのですね。だから、なんかこう、僕が訴えかけているのは、「自分はケーキ屋で、そのケーキっていうものを売るのじゃなくて、ケーキが各家族にあると、その場が和む、幸せな気持ちになる」ということなのです。

だから、ケーキ屋さんのケーキって、色んな人間の 「事づくり」なんです。色んな出来事の中にある事、例えばウェディングケーキだとか、バースデーケーキだとか、誰かとお茶するために持っていったり。だから、世の中の仕事ってみんなそういう風な感じで、意味があるのですよ。僕は、その意味のある仕事を、夢をもってやり続ければ、必ず誰か分かってくれる人がいると思うのです。それが日本国内だけじゃなくて、世界中に広がればいいですね。

上海・香港からの投資

＊以前上海にも出店されていた。

松坂：マレーシアのサイモンさんっていう方と、アンディさんっていう方が突然ここを訪れたのです。上海の、「上海アルパジョンをやりたい」と。「僕は、お金は出しませんよ」と。「いや私（サイモン）が出します」と。

佐々木：ええ！

松坂：投資家はサイモンで、社長はアンディでした。それで、「どういうビジネスするのですか」って聞いたのです。そうしたら「上海の五つ星レストランとか、ホテル、例えばリッツカールトンとかフォーシーズンズとか、そういうホテルの地下一階とか一階に朝の八甲田のお店を作ります」ということで。上海の一等地にオフィスを構えて、投資してもらってやったのです。今はやってないですけど、そういう風にして、海外の方はこの商品を売る。その前は、香港大学の教授が自分の教え子を連れてきて。要は、香港大学の経済学部のビジネス・モデルとして、「これからチャイニーズを巻き込んでどうやって事業を組み立てていけるか」というテーマで事業をやりたいと。その中で、僕の「朝の八甲田チーズケーキ」が一つのアイデアだったのです。教授が香港でこの「アルパジョンをやりたい」と。それで、「株の 51 パーセントを僕が持ちたい。残り 49 パーセントを松坂和原に持たせたい」と。結局話はなくなったのですけど、向こうからくるのですね。

シンガポールでの大統領主催パーティ

松坂：今、このコロナがなかったら、本当は今年（2020 年）の 7 月にシンガポールで大統領主催のパーティがあって、それに参加する予定だったのです。お客さんが 600 人くらい参加する大統領主催のパーティです。実はアデリンさんという、デザイナーというかアーティストがいらっしゃって。その方の絵は、北朝鮮の金正恩総書記とトランプ大統領が会談したホテルに沢山飾っているそうなのですけど。そのアデリンさんの旦那さんがお店に来たのです。その旦那さんは実は、シンガポールの日本総領事館の職員なのです。そういった経緯で、ちょうどいらっしゃったので、「アデリン、マダム・アデリン・ショコラっていうのを、僕作ります」って言ったのです。そしたらアデリンさんたちが、「松坂さんたちがつくったショコラを、7 月のシンガポール大統領のパーティあるから、そこで発表しよう」ってことになったのです。

松坂：じゃあ僕はどんなお菓子を作ろうという話になったのですが。実はパッケージも凝っています。オバマ元大統領のご夫人、ミッシェル夫人がお抱えの、「フラン（FRAN'S CHOCOLATES）」っていうチョコレート屋がシアトルにあるのです。その、「フラン」のチョコレートが入っている箱があるのです。実はそれは、日本の漆塗りなのです（写真）[1]。これを仕掛けたのが、日本マイクロソフトをビルゲイツと一緒に立ち上げた、松本さんという方なのですが、その方が今、シアトルの湖のほとりに家を建てて、投資家やっているのです。その松本さんは、フランにも投資していて、この漆塗りをやったのです。僕は僕で松本さんと厚意にしているものだから、「よし、じゃあ、アデリン・ショコラもこれでいこう」ということになりました。チョコレートの方も、商品作って本人たちに味見させました。チョコレートは日本酒の酒かすを使ったものにしました。

人脈の大切さ

松坂：東京オリンピックに向けて、外務省が「ジャパンハウス」っていうのを三つ作ったのです。ロンドン、サンパウロ、ハリウッド（ロス・アンジェルス）に。それでハリウッドのジャパンハウスに招待されたのです。

佐々木：もう世界的に活躍されていますね。

松坂：いやね、そんなのだれでもできるから。人脈があれば。日本政府もハリウッドに店を出したい、ロンドンに店を出したい。ただ日本にいる日本人だけじゃできないのです。なので、日本人が関わっている組織で、そこの現地に会社を持っている人が必要なのです。そういう方しかできないのです。そこに何年も住んで、そこでビジネスができている人でなければだめなのですよ。僕がハリウッドに行ったのは、ハリウッドにあるテレビ会社の社長が知り合いだったのです。今は、ハリウッドエンターテインメントっていうテレビ会社の社長です。その方が、ジャパンハウスを外務省から請け負ったのです。それでこの方が、ハリウッドのジャパンハウスの館長を海部元総理の娘にして、Xジャパンの YOSHIKI さんですとかお呼びして、グラウンドオープンまでやったのです。河野太郎さんとかいらっしゃって。スピーチして。

（中略）

松坂：僕を呼んでくれたその社長（寺坂さん）との出会いって、ロサンゼルスの路上で、「八甲田チーズケーキ」を売っていたのがきっかけだったのですよ。

佐々木：ロサンゼルスで！

松坂：どうせ、どうせ関係ないと思っているから、「グッモーニング！モーニング！」って。目に見えている人、皆に「グッモーニング！モーニング！」ってやっていたわけですよ。「ヘイ！」って、手を振りながら。「ジャパニーズ、ナンバーワン、チーズケーキ！」

って。そうすると、みんな見るわけですよ。そしうて、「カモン、カモン！」って、自分のとこに、白人も黒人も来るようにして。「ジャパニーズ、ベリー、ベリー、ナイスチーズケーキ！ナンバーワンチーズケーキ！」ってやるわけですよ。そうすると、ニコって笑うわけですよ。たまに、「ジャパニーズ、ワサビ！ワサビチーズケーキ！」って、抹茶ケーキを見せて。グリーンティーをワサビってわざと言って。ワサビっていう言葉はみんな、寿司で覚えているわけですよ。そうやって笑いを取りながら、売っていたのですよ。

松坂：そしたらある時、寺坂さのが、「松阪さのって面白いね」っていうので。僕は、「いやいやほんとに俺、ここまで商品もってきて、ここで売れ残ったらだめだから、もう、全部売るのだ」と言ったのです。「全部売らなきゃダメなんだ」と。そこからですよ。「じゃあ、ハリウッドでプロモーションビデオ撮ろう」とか、もう話がトントン拍子で。

世界の常識と日本の常識

松坂：南カルフォルニの温暖な気候のもと、大学の教授や芸能関係の人も、もうそこで優雅に、日本みたいにギシギシした感覚ではなく、自由な感覚で、のどかに生きているのですよ。でも、夜は危なくて、ピストルで殺されるかもしれないのですよ。そう考えると、日本の常識は世界の非常識なのですよ。本当は自分の身は自分で守らなきゃいけないのです。僕が 22 歳の時に、初めてフランス行った時もそうでした。ジプシーだらけで、普通に歩いたって、もう、子供から大人から、みんな、ぱあーっと自分に覆いかぶさってくるのだから。それで自分のもの取られる。だから、日本の常識世界の非常識なのですよ。それがわからないで、外に行くと、命何個あっても足りないかもしれないわけですよ。だから、そういう危機感をもっていくといいですね。

松坂：僕がニューヨークで出会ったのがダンさん。ダンさんも勉強している学生だったけど、もう夜も、アルバイトしないと日本からの仕送りだけだと生きていけないのです。ということは、守られてない。お金に余裕がなければ、しっかりした意思持たないとダメなのです。だって、日本みたいにアパートに住みたいっていっても、安いアパートがない。最低でも二十何万ってするのだから。収入も多少は得ながら、海外でアルバイトもしながら、目標を持ってやっているのです。日本の学生みたく守られてないわけですよ。（中略）簡単な気持ちではだめだよね。だって、日本でわがままに「自分の言っている言葉も分かんないの」とか、「あの人なんでああいう性格」とか。そんなこと言っている次元の前に、まず言葉が伝わらないことには、今日食べるご飯すらないのです。だからやっぱり、最後は人間力で、自分はもう別に道路で寝てもいい。自分が周りから危害を加えられないように、自分の身は自分で守るのだと。そのくらいの気持ちがないと、やっぱり駄目だと思う。だから、あんまりひ弱な環境っていうのは、自分を弱くしますね。

松坂：そういう気持ちをちゃんと持っていけば、世界中にはやさしい人もいっぱいいるし、その地域の中で治安の悪いのを避けて、そういうのには関わらないような生き方している人たちが沢山住んでいるから。やっぱりそういう地区を選んで、いい人たちと繋がるように。そういう経験を一回すると、その現地に人たちが好きになる。

台湾の仕事仲間

松坂：丁さんは日本が好きなのです。親に「あんたはどういう風に将来なりたい？」って言われたときに、「日本に行きたい」って。それで日本の大学、国士舘に入ったのです。その後、台湾で芸能人やったのです。彼は俳優なのです。それで俳優やりながら、インターネットの会社やったり、ラーメン屋やったり。（中略）それでテレビショッピングで、「お兄さんテレビ出て、八甲田チーズケーキ作って」って言われて（笑）。「ああ、わかった、わかった」って言って、作ったのです。それから、台湾のテレビショッピングやることになったのです。台湾の方は本当に日本が好きなのです。日本が憧れなのです。もう小さいころから、丁さんは家族を僕に紹介してくれるのです。それで、僕も家族を紹介するわけです。そうして、僕が台湾のアルパジョンやるって言ったときに、彼の自宅に行って彼のお父さんに会ったのですけど。そしたら「うちの丁が日本人と一緒にビジネスできるのは、台湾人として大変名誉なことだ」って言われたのです。お父さんのお葬式にも参加しました。その時のお葬式の音楽は「千の風にのって」でした。

松坂：韓国の有名なテレビショッピングの社長とか来たのですけど、その時に言ったのです、彼らに。「僕たちの先人が戦争で、こういうことをやってしまった歴史があって、学校の教科書問題でもなんでも、いろんな問題が沢山あると思うのです。けど僕たちの代で、これを緩和していこう」って。韓国のテレビショッピングの社長に。今は風評で日本のものを出してもなかなか売れないのです。芸能でもなんでもそうです。だから、一人一人が自分たちの考えをちゃんと持たないといけないのです。あの人（国）嫌いと思うのではなくて、どうやったら世界が平和になるだろうと考える。それが、人と人で大事なことだと思うのです。

シアトルの友人

松坂：この人は、シアトルに三十何年いるのです。青森出身です。みかさん。青森のミスねぶたになった方の妹さん。たまたま僕がシアトルに行ったときに知り合った、Gangho 君という人がいて、「自分が出資するから、シアトルにパン屋とケーキ屋やりたい」と言うのです。それで、ロサンゼルスから車でシアトルに行って、この Gangho 君含め、青森出身のみかさんたちと 27 軒ケーキ屋回ったのです。そして「松坂さんできるか」と。スターバックスの一号店はシアトルにあるのですよ。なのでアメリカに店を出すのだったらまずシアトルに一号店を出したいと。アメリカは、夢がある人にはお金出す国ですね。いろんな可能性がある人。ちなみに僕がこの Gangho 君とみかさんをくっつけたのですよ。そして、みかさんの実家が青森だったから、Gangho 君は、青森で結婚式やったのです（笑）。

松坂：Gangho 君は日本の学生さんたちを、シアトルでそういうプログラム作って、サポートしているのです。東洋大学とか、神奈川大学とかいろんな大学と提携しながら、学生さんたちにいろんな可能性を与えている。だから Gangho 君につながれば、日本からの学生さんたちをみんな受け入れてくれる。

アルパジョン・インターナショナルにむけて

松坂：最近は英語が堪能なスタッフを二人採用しました。一人は香港の方で。シンガポールの空港の税関を 7 年やって。日本が好きで、この青森も各駅電車の旅が好きで。それで、今、東京で英会話の教室の先生なんかをやりながら。僕が求人出したら応募してくれて。それで東京でこの前、面接して。これからビザが取れれば、採用です。あともう一人は、ワシントン大学の卒業生。アメリカでずっと仕事していたのですけど。実家が青森だから戻ってきたのです。その方は、来年。面接では、僕のアメリカにいる友人たちとトークさせたりしました。

松坂：英語能力はどれくらいのものか、テストしたのです。自分たちで新しい仕組みを作りたいのです。アルパジョン・インターナショナルっていう会社として、アルパジョンの持っている商品だけを販売するのではなくて、青森県内の例えば、ほたてとか、黒ニンニクとか、この青森の物産の商品を、ビジネスをつなげる代行業務を行う。県とか市とかでいろいろそのビジネス商談会でやるのですけど、結局いつまでたっても、進まない。県の国際課も、八戸市も、英語とか中国語とか話せるスタッフがいないのです。毎回お決まりの通訳を入れてやっているレベルで。さらに役所の人間は 3 年に一回とか、2 年に一回変わるので、いつもまたゼロからなのです。それなら、自分でやってみようと思ったのです。

松坂：学校側がしっかりしたコンセプトを持って、学生さんがやる気があるのだったら、いくらでもいろんな人と繋げられる。僕このチーズケーキ売るために、何が一番大事かなって思ったときに、人脈だったのです。一番手っ取り早いのは、ロサンゼルスに、倫理法人会っていうのを作ったのですよ。倫理法人会っていうのは、日本国内でも、いろんな企業の社長たちが作るのですけど、今から 4 年くらい前に僕の友人が、カルフォルニアで最初につくりました。というのも、最初は青森の商品を海外で売ってもらいたいというので、青森県海外販売促進協議会という組織が作られたのです。その時のメンバーは、黒ニンニクの柏崎さん、弘前のカネショウの櫛引さん、あと弘前の山野林檎さん、私だったのです。そこから、色々な人脈が出来ました。それで細かく営業するのではなくて、日本人で、アメリカで活躍している社長たちと手を組むのが早いと思ったのです。建築会社から、味噌屋から、すべてあるので。さらに、その日本の会社に対して、だれがスポンサーで、出資しているとかそれも分かるのです。そういう人たちと手を組んでいるのです。逆に、僕が何でアメリカに会社を作れないかと言えば、人脈がいないのです。人脈はアメリカにはいるけど、外国で商売するには、外国に対応能力がなきゃダメなのです。

人材が欲しいとの声をよく聞く

松坂：マイクロソフトの、ビルゲイツと一緒にやってきた松本さんたちと 4 人で、シアトルで、カラオケ歌いに行ったのですよ。カラオケっていうのは、ゴルフと一緒でそれが営業なのです。そして、日本に僕が帰ってきたら、すぐ、「松坂さん」って。「アメリカのなんとかっていう、インターネット会社の枠が一人空いた」と。「誰かいないか」と。でも八戸大学や、ヤフーサイトの創業者の知り合いに言っても、学生で手を挙げ

るのが誰もいないのです。みんなビビっちゃって（笑）。

松坂：先に紹介した青森出身のゆかさんも、アマゾンの本社にいたのです。ところが、アマゾンの本社で働いる日本人は数十名、ほとんど、チャイニーズとインド人です。それだけ、日本人でアマゾンの本社で対応できる人がいないのです。同じ先輩で、やれている人いたのだから、次の若い人たちがトライすればいいと思うのですけど。本当にそういう風に行ける学生を育てればいいと思うのです。日本語使わないで、全部英語でやる。独身で最低でも 3 年から 5 年はやめないで、そこでキャリアを作るというような人がいれば、送り込めるけど。松本さんなんかは「松坂さん、いいよ、預かるよ」って。自分の家で、ゲストルームあるのです。預かるのですよ。この前行った時も、この前こっちに来てくれた時も、早稲田の学生連れてきたのです。松本さんの家に、住み込みで。でもやる気がある人は、みんな「おお、よしわかった。受け入れてやる」っていう人いっぱいいます。

壁をつくらず、失敗を恐れず

松坂：僕の結論は、自分自身が趣味を持って、枠を作らないで、壁を作らないで。そして、フレンドリーに。どうせだったら、いい印象を持たれるように。自分に魅力があって、いつでもどこでも損得なしに、会話できる仲間が世界中にいればいい。それには自分が行ったら、その足跡を残さなければならない。足跡を残せる人は、インパクトが強くて、印象に残るから。覚えてくれるのですよ。

松坂：みんないろんな出会いがあるのですよ。でも成功するとか、しないとか思わないで。そもそも成功って何なの。先に失敗したほうが、成功したとき、ちょっと嬉しいかもしれない。僕の人生は、7 割失敗、3 割成功。失敗のほうが多い。だけど、失敗したときに、落ち込まないで、これは、いつか実るための失敗なのだと思えば、それが経験ですよね。

註

1　FRAN’S CHOCOLATES の公式 HP より（https://franschocolates.jp/products/frans-gifting）

7　八戸市　インドカレー　UTSAV（ウサブ）

調査概要

日時：2020 年 11 月 1 日

参加者：佐々木てる、神なぎさ
　　前川美穂香、亀岡紗衣

語り手：インドカレーUTSAV（ウサブ）
　　店長　スベディ・ナラン・ダッタ

聞き取りメモ

出身：ネパール

経歴：インドで 12 年修行。技能ビザで来日。その後、2005 年から経営者としてカレー店経営。

ビザ：経営・管理。
　　八戸市と十和田市、二店舗経営している。

来日経緯

ダッタ：ほかの国に比べたら、日本人はほんとに優しいみたいですから、行こうと思って。2014 年に、子供生まれたのですよ。そのあと、自分だけ行こうかなと思って。2005 年から。最初はちょっと店に来て、大体 1 年ぐらいこっちでして。今自分で経営して。
佐々木：独立して。ここのお店は今で 15 年くらいですか。
ダッタ：2005 年 4 月から、もう私の経営。
佐々木：シェフもう 1 人いいますよね。
ダッタ：もう 1 人はいます。
佐々木：あの方は親戚ですか。
ダッタ：親戚ではないです。
佐々木：なんか知り合い雇ったのですか。
ダッタ：知り合いでもないです。去年インドから直接入ってきて
佐々木：インドからですか。ネパールじゃない。
ダッタ：ここで働いているネパール人なのですけど。料理作ったりして。
ダッタ：募集はしなかったのですけど、ちょっと知り合いぐらいで。

青森について

佐々木：青森はどうですか。
ダッタ：やっぱりやっぱり日本にコミュニティがあって。それの中でちょっと、はい。あー、割といいですね。私もともとネパールの山の方で、これぐらい寒いところに生まれて。その後引っ越して。お父さんと。ちょっとインドに近い、暖かいところに行っていて。今はそっちに住んでいて。こっち来たら、もともと生まれた所の天気と、寒いとか、雪とか、だいたい一緒でした。奥さんはちょっと難しいのだけど。

子ども

佐々木：お子さんは今日本の学校ですか。
ダッタ：はい。日本の学校です。
ダッタ：小学校一年生。
佐々木：14 年にお子さん生まれたということは、日本で生まれたのですか。
ダッタ：はい。奈良県で生まれました。
ダッタ：もう一人はこっち、八戸で。2 人います。
佐々木：八戸の学校に通っているのですか。
ダッタ：はい。八戸。
ダッタ：子供たち寿司食べさせないと、「食べたい、食べ　たい」って言って。ほとんど子供たちは日本向けになっているから。もう寿司も作るし、ラーメンもとか色々作ったりして、おにぎりとか味噌汁とかよく作っているから、食べるのですよ。
佐々木：子供たちテレビとか見ていますか。アニメとか。
ダッタ：テレビ見たり、あと、わかんないことは、夜に来ている方たちとか、日本人の方たちとか、皆さんにシェアして教えてもらって。
ダッタ：ずっと日本に住みたい人いるよ。私はあの子供　　たちがこっち学校だから、どうしても長く住めないと。もうぐちゃぐちゃになっちゃってる。今ネパール語も少し

わかるにはわかるけど、話ができなくなってきている。日本語以外はなんも喋ってないから。

友人

佐々木：友達のネパール人は近くにいますか。
ダッタ：何人かいるのですけど、あまり、関係はないですね。

在留資格

佐々木：ビザって何ビザですか？
ダッタ：今は管理系です（経営・管理）。最初は技能でした。
佐々木：何年ごとに更新ですか。
ダッタ：まだ１年ずつです。

今後の予定

佐々木：将来どうどうするつもりですか。
ダッタ：まだ子供たちが小さので。今まだ、学校に入っているから。これから子供たちの勉強とか、いろいろな事のために、今ちょっと頑張っていかないと。
佐々木：永住権はとるつもりですか。
ダッタ：そうですね。できれば持っておきたいですけどね。できないことはないと思うのです。

現状

佐々木：コロナウイルスの影響で、お店大変じゃないですか。
ダッタ：私たちは、手作りのスパイスを作ってやっています。お客さん来て食べたりもしているし、お持ち帰りもしている。ちょっと危ないときはテイクアウトが多いですね。今日のお客さんの数はいつもより少ないですね。待っていて食べるぐらい。土曜日、日曜日は特に。今日はあんまり混んでなかったですね。土曜日、日曜日。それと、月末にはもうちょっと来ます。25 日すぎるともう少し増えます。

苦労

佐々木：こっちで生活していて、大変なことは何ですか。やはり日本語ですか。
ダッタ：車の免許取る前、日本語はまあやっていました。雪降る前はいいのですが、寒いときは毎日タクシーとか使っていて。その時は大変だな、と思っていたのですけど。その後、免許とってからは、まあだいたい大丈夫ですね。
佐々木：奥さんも一緒に働いているのですか。
ダッタ：一緒にサポートしてくれています。今は子供を見ているのですよ。友達と一緒に。今日は子供たちと十和田に行っています。そういう時はちょっと忙しくなるのだけど。

食事サポートしてくれています。

佐々木：ネパールには、あの家族いらっしゃるのですか。

ダッタ：います。

佐々木：帰って来いとか言われませんか。

ダッタ：去年お父さんとお母さんが観光ビザで来ました。でも、今年はコロナで。あと子供たち学校いるから。子どもが休みの時以外は、ずっと行けない感じになっています。

カレー店の特徴

佐々木：何かあります？大丈夫？スパイスとかはどうしているのですか？

ダッタ：スパイスは東京の専門店から購入しています。来月 1 か月分とか頼んでいます。

佐々木：味はちょっと違いますね。

ダッタ：作り方とかは色々。

佐々木：ネパールでは何年ぐらいコックさんやっていたのですか。

ダッタ：12 年かな。インドで。最初にインドに行って、ちょっと料理習いに行って。確か 17 歳くらいの時。

国籍取得について

佐々木：日本の国籍は取得したいですか。

ダッタ：それは取りたいけどね。私は今、自分家賃払っているから。その家賃払う分、ローンで払えれば、後で子供たちに残せるから。そういうことも考えたのですけど、なかなか。永住していないと銀行からローンとかもちょっと無理だし。もうちょっと頑張って、永住権とか取りたいのですけどね。子供たちがもう少し大きくなって、8 歳とか 9 歳くらいになったら、一回申請してみようかと思っています。永住権のこともちょっと、一回聞いてみたのですけど。日本語 N3 とか N2 とかなんかといわれて。そうでないとちょっと難しいみたいです。漢字とかはまだ難しい。カタカナとか少し読んだり書いたりするのはできるのですが。

8　フィリピン人永住者 E さん

調査概要

語り手：E さん（1967 年 2 月 14 日生まれ）
聞き手：佐々木てる、榑井寧々、金澤零治、工藤恵
場所：弘前市　エース
日時：2020 年 10 月 9 日　20：00〜20：40

聞き取りメモ

・19 歳の時に歌手の仕事で日本(千葉・銚子)へ
　帰国→浅草（半年）→君津市。当時の夫は水戸。
・来日当初は日曜日も休み無しで働く。
・初めて青森に来たのは 21 の時
・前旦那さんとの子どもが 2 人（30 歳、26 歳）→マニラ市在住
　現旦那さんとの子どもが 2 人いる（21 歳、16 歳）
　→夫は弘前で働いている（青森市、三内に実家がある）
　　娘は青森に住んでいて、大学に在学中。
・永住ビザを取得
・日本に 3 人兄弟がいる

・現在お店を経営。独立して 4 年目。

来日の経緯

佐々木：日本は長いのですか。こちらで生まれたわけじゃないのですか。
E：そうですね、こちら生まれじゃないです。
佐々木：いつ日本いいらっしゃったんですか。
E：私は、まず仕事で来てた。
佐々木：いくつぐらいの時ですか。
E：19 歳ですね。
佐々木：19 歳ですか。仕事だとエンターテイナーのビザ、興行 VISA になるわけですね
E：そうですね、はい。あの、歌手で来てました。
佐々木：フィリピンでは歌手の専門学校とか通われていたんですか。
E：学校はなくて、自分で練習して。そのあとプロダクションのオーディションに参加して。4 人か 5 人と歌わされて。そのあと合格して日本に。
佐々木：最初に日本に来られたのはどちらにいらっしゃいましたか。
E：銚子ですね、千葉県。そこで半年、歌手として。私だけでなくてダンサーと一緒に。

仕事の内容

佐々木：仕事はどんな感じでしたか。週何日くらい仕事でしたか。
E：その頃は毎日ですね。日曜日でも休み無し。毎日です。
佐々木：毎日ですか、ほんとに、大変ですね
E：なんにも、休みない。寝てお昼起きたら、みんなで買い物いくけど、ただ見るだけ。やっぱり最初はお金ないし。無駄な買い物とかしないで。私たちなんのために日本にいるか。みんな家族大きいじゃないですか。私は、兄弟 9 人です。一番上のお姉ちゃんもいるけど、上から二番目です。うちはそんなお金持ちでもないし、貧乏でもないし。うちはお母さん、お父さん 2 人で服を作っているショップがあった。そしたら、その店の売り上げが、どんどん落ちてきたから。うちのお父は外国、サウジアラビアに出稼ぎに。私はまだフィリピンにいた時で、兄弟まだ小さいのです。兄弟はまだ小さいので、それでちょっと、お母も本当は行かせたくないけど、お金のこと、ご飯食べるため。そういうことがあったから、それでお父は出稼ぎ行って。その時は、私はまだ中学生だったかな。お母が毎日もう大変で。洗濯も。（想い出すと）涙出てくる。
佐々木：9 人ですからね。
E：そう。それ見た瞬間に。お父外国行ってもそんなお金になっていなかったから。350 ドル。送る時の 100 ドルだけ。これだけでどう生活するかと。それで私、友達いて。たまたまその友達が、「日本で仕事するけど、どう？」って。「行こう」って言われて。そこからちょっと、親に内緒で。でもやっぱりどうしようって。私、学校も、大学も、なんも終わってないし。ハイスクールまでで。あと 1 年くらいだけ、髪の勉強。まだ終わってないけど。お金足りなくて。それで友達と一緒に。それで一生懸命自分歌って。たぶんお母は「不思議だな」と思ってたと思うのだけど。カセットテープも何もないので、ほかの友達から借りて。練習するために。すごかった。そしたら、お母に

言わないと「ダメだな」と思った時（があって）。それで言った時は、すごいお母大反対だった。大反対だった。でも、「苦しいからお願い行かせて」って言って。ほんとにオーディション受けたのよ。そのあと、受かったのだけどお母に黙ってて。キャンセルすれば、罰金なるから。それでお母さんすごく泣いて泣いて。（私を）行かせた。それで日本に来て。半年位は日本語何も分からないし。その時は、みんなこうゆうノート持ってもちながら、お客と会話してた。でもその時はすごく不安で、怖かった。こっち（日本）来る前にみんなで見てるんだけど、でも、怖いんだけど来た。

当時の生活

E：住居はある。ご飯は、米はある。おかずだけ私たち。

佐々木：でも 1000 円、1 日 1000 円ですか。

E： 1 日じゃない、15days、半月。あの月 2 回で 2000 円。それ以外はチップ。お客からチップ貰えば、そこからみんなこう（やりくりする）。

E：欲しいもの買いたい時でも、買えない。でもそれはいい。みんな仕事してたのは、なぜ日本来たかって、家庭。家族をみんな守って、お母のために、兄弟のためにそれでみんな出稼ぎ来てる。みんなだいたい同じです。大変だけどみんな。不安で。うん。遠くて、言葉も分からない。でもそれでも日本来て働いて。うん。

二回目の来日

佐々木：半年してから 1 回帰ったんですか。

E：夜の仕事はあまり好きじゃないので、その仕事辞めるために（帰国した）。でも「また日本に戻りたい、働きたい」と思って。フィリピンはやっぱり、上と下もあるから。学校も終わらないと、仕事もなかなか出来ないし。私たちはたいてい、女性がやっぱり家にいるみたいな感じ。お母はやっぱり厳しすぎ。友達と一緒にパーティーとか、うちのお母は行かせてもらえなかった。すごく厳しかった。もう時間には帰んないとだめ。今も厳しいんだけど

佐々木：二回目の来日は。

E：結婚の約束相手がいて。こうゆう（夜の）仕事はしたくないけど。相手が「来ないか」って。日本語まだ分からなかったので、ただ「はいはい」で。うちのお母さんは大反対。大反対だったけど、夜の仕事でもいいって。待ってられないから。フィリピンで 1 年いて。もう待ってられないから日本に行って。それから浅草に。浅草の千束通りの方。そこ。そんな大きくないお店で。そこも歌手として歌ってて。あと、ダンサーもいるけど、そこは大きいステージなかったから。ダンサー別に何も踊ってない。みんなこうついて、お客とお話する。そのあと一回、フィリピンに帰って。次に君津、千葉県の君津いって。

来日三回目の経緯

E：（私が日本に行く）そのかわりに、私のお父外国から帰ったの。私が代わりに、その時は 2 回目の時。代わりに私働いて。（洋服の）お店、ミシンとかみんなダメになったじゃない。で、また新しく買って。家も田んぼになって。それも自分で一生懸命はたら

いて頑張って。欲しいものは買いたいけど買えないから。別にいいよって、家帰って、お母って、涙ながして喜んで。そしたら兄弟も、こうなんか、日本にあるもの、フィリピンに無いものをみんな喜ぶ。一番いいはカップラーメンとかチョコレートとかね。それから結婚してここ弘前に。

結婚の経緯

E：その（結婚した）人は銚子にいて。おかあ、おとうは、私が浅草にいた時は会いに来たんだけど。言葉まだ分からないからね。３回目こっち（日本に）来て、帰って、今度は私のフィアンセ、旦那がフィリピンに来て。そこから結婚して。

佐々木：青森の方だったんですか。

E：そうですね、青森なんですけど／／佐々木：でも君津出会われたんですか／／君津で仕事してたんだけど、東京で手続きしたんですよ。すぐ日本来れるように。まず結婚して、フィリピンいったらまた来て。今はそうゆうやり方はもうダメ。前はそんな厳しくない。社長にパスポート貸して、籍入れるため。東京で。それから結婚してフィリピン行って。また、日本に戻ってきてちょっと時間あって仕事したんだけど。そのあと（夫の）おかあ、弘前のおかあが東京まで、迎えに来て（そのあと青森へ）。寝台列車わかります。あれで乗ったんだけど、すごい時間かかった。こんな遠いんですか青森。最初、旦那は「千葉に住む」とか言ってて。「ちゃんと家もあるんだ」って。そしたら、「あれ？なんで？」。私全然わかんない。「なんで、どうして、どこ行くの？」って。何時間も乗ってたんだな。東京からここ（青森）まで。寝台車だったら何時間だっけ。／／佐々木：12～13 時間。一晩かけて、日本海側通ってきたのかな／／全然寝れなくて、うん。

佐々木：いくつぐらいの時ですか？青森にきたのは

E：20～21 歳ぐらい

佐々木：それからずっと青森で生活

E：弘前で、生活して。これがね、こっちに来た時、まだ何ヶ月間だっけ。何ヶ月間で、うちの元旦那のおかあがすぐ、鍛冶町のどこかのお店のママに私を紹介したわけ。したっきゃ、なんか「あそこ、あそこ」って。（こっちも）津軽弁分からないから「あ、はいはい」私、「はいはい」って。「え？なんで？私、夜の仕事嫌いだけど、なんで」って。旦那もまだ水戸にいるから、

佐々木：その時はまだ、旦那さんは水戸にいたんですね。

E：まだ、水戸にいるから。でそれで、おかあが、なに喋っても、「はいはい」だけしか言えないから。

再婚の経緯

E：私の（元）旦那とは二人子供出来た。

佐々木：お二人。今お子さんはどうなさってるんですか。

E：もう孫もいる。二番目の旦那の子ども。お兄ちゃんに。再婚しました。男の子二人。私が、子供を引き取って一緒に生活してます。

佐々木：じゃあ４人育ててる。

E：そうですね、でも２人はもう結婚してるから。一番上の子が 30 歳、次が 26 かな。今大学そうですね３年生が一人。高校一年生。16 かな。今は自分でバイトもしてる。お兄ちゃんは、高校からもうマクドナルドで働きながら。自分の力で頑張ってやってる。私にはそんな迷惑かけてくれないの。一生懸命ですよ。免許、車の免許でも自分で。私じゃない。旦那は近くで働いてます。

佐々木：旦那様はどちらの方、弘前の方ですか。

E：いま、弘前ですね。知り合った時は、おかあも、おとうもいたんだけど。もう亡くなって。実家は三内丸山。そこに家あります。でその時、弘前から青森に行って。夜の仕事やめた時、普通の主婦やって。ホタテ工場にも行ったんです。新青森駅の近くで。工場いって。そしたら、やっぱりずっとここ（弘前）にいたから、青森に慣れてない。ちょっとごめんだけど、近所の人、あんまり話しかけてこない。みんな暗い。それで、またここ、鍛冶町の方に来て、最初はバイトだけ、手伝いだけなんだけど。今度は自分の店やることになって。その前はただ、任せてもらってる、みたいな感じだったけど。その時の店の名前は、「E」じゃなくて「オシャレドロップ」ってゆう店で。「オシャレドロップ」の店を閉るって言われて、１年半で。その時私、常連のお客が結構いたので。良いお客ばっかり。役所とか、保育園とか、あと、おっきい会社とか。お客が飲みに来てたので、店を辞めればなんか、みんな悪い、それで続けて、自分の名前で店やって。でもまぁやっぱり大変です。今このコロナでね。でもさ。私もここ働きながら子供達も大きくなったし。お兄ちゃん達も、もうそれぞれ。昔と違うから。みんな自分でちゃんとやってるし。私もここ以外に畑、りんご農家の知り合いのとこにちょっと手伝いに行って。３年位は手伝いに行ってるけど、そこで凄いお世話になってる。すごいいい人で。今日もいったし。毎日いってる。

佐々木：ここのお店は何年くらいですか。

E：ここですね、ここはもう 4 年なるかな。来年 4 年。

現在のお店

佐々木：お店は何時からですか。

E：ここは 20 時からです。

佐々木：そうですか、夜は何時くらいまで。

E：もう誰も来ないと 23 時で閉める。大体 1 時までなんですけど、遅い時は 1 時 30 分とか。お昼も仕事してるから、ちょっと早めに帰る。でもこれから畑はもう終わるから、多分前と同じに３時とか４時はまで。そうゆう時は頑張る。「いいよ、いいよ」って頑張る。

佐々木：冬場は大変ですね。

E：そうですね、まあお昼の仕事ないから。ずっと寝てるから大丈夫。

佐々木：今後も青森にずっと住むつもりですか。

E：わかんないけど、子供たちいるなら、ずっとここにいます。

国籍とビザ

佐々木：国籍はフィリピンのままですか

E：そうですね、そのままで
佐々木：永住権はとったのですか
E：永住権は要らない。現在は、ずっといられるビザなんです。
佐々木：定住ビザかな
E：最初ね、半年じゃなくて１年とか、なかなか３年もらえない。なんでか分からないけど。子供出来た時はビザが３年。そしたらもう６年、７年かな。７年目。それから永住ビザ。
佐々木：日本の方と結婚してお子いらっしゃれば、永住ビザもらえますね。
E：そうですね
佐々木：本国、フィリピンには戻る予定はありますか。
E：私、店（自分で）やってから帰れなくなった。
佐々木：ではもう４年くらい。
E：もう何年帰ってない。でも私の妹とか、フィリピンから３回くらいは来たんだけど。でもやっぱり自分の生まれ故郷に帰りたいよ

日本国籍取得について
佐々木：日本の国籍は取ろうとか思わないのですか。
E：前、取りなさいって言われたけど。その時に相談したんだけど、小学校１～２年生までの漢字とか、３年生までの漢字とか読めないとダメとか聞いて。無理かもと思って。日本国籍とったら、フィリピン帰って長くいられないから。もう観光になるから。多分１週間くらいしかいられないので。（日本国籍なくても）そんな変わらないので。戸籍謄本見れば結婚してる、一緒に住んでる、そうゆうのが書かれてるみたいなので。
佐々木：お子さんは日本国籍ですか。
E：そうですね。わたしも別にもう日本人。心が日本人。言葉だけ下手くそ。それでもアクセントは津軽弁。英語より津軽弁。
佐々木：英語はやっぱり普通に喋れるんですか？
E：前はね。でもやっぱりアクセントもちょっと変わってる。うちの妹が遊びに来た時、私の歌ちょっと変だって。アクセントがかわってるって。やっぱり日本語。一番わかってるのは日本語。

フィリピン人コミュニティ
佐々木：教会にいくとやっぱりフィリピンの方多いのですか。
E：最近はみんな集まってない。最近はみんなバラバラになってる。みんなバラバラ。みんな教会じゃなくて誰かの家に集まって、ご飯食べながら、フィリピンの料理たべて話してる。
佐々木：最近若い子はフィリピンから来たりはしないですか、20 代とか。
E：いるね。大学生の子なんだけど。お母が結婚して、その子をフィリピンから連れてきて。中学校から入ったかな。
佐々木：昔みたいにエンターテイナーで来る方はいないのですか。
E：今はもう居ません。いない。最後、一昨年かな。ちょっとあったけど、もうないね。

佐々木：もう 1 つ聞きたかったんですけど、福祉関係、あの介護とかそうゆうお仕事に昔エンターテイナーで入ってきた方が働いているという話を聞くんですけど。やはりこちらでもそうですか。

E：いますいます。何人かいますよ。介護やってる。夜の仕事辞めて、介護やってる。力あるんだったら、私もやってもいいけど、大変みたい。みんながんばってるよ。

工藤：うちのお母も、チャレンジしたことあったんですけど、やっぱり文字書いたり、その日のことをまとめる時とか大変で。それでやっぱり続けられなかったってらしいです。

E：私も多分無理かも。パワーが無いもん。出来ないと思う。ほんとに力が必要なのよ、そうゆう仕事は。でも何人いるかな。５人いる。あと、友達の娘も介護やってる。

9　フィリピン人　永住者　Aさん

調査概要

日時：2020 年 10 月 10 日 AM10：00～11：30

場所：弘前のお店

聞き手：佐々木てる、工藤恵、博井寧々、金澤零士

語り手：A さん

フィリピンの家族

佐々木：お生まれはフィリピンですか。

A：フィリピンです。フィリピンのマニラ。マカティ。一応都会。

佐々木：そうですか。御家族は、何人くらい。

A：家族、うーん、めっちゃ複雑なんです。まず、父親いないで生まれたんです。母親 1 人に育てられて。義理の兄もいるんです。義理の兄弟が多いんです。もうほんとに、どこから喋ったらいいのかわかんなくて。義理の兄は、フィリピンにいるんです。その兄の次がわたし。私の下に、義理の弟が 2 人。だんで、父親が違うんですよ。弟 2 人は、日本人の人と出来た子供なんです。

佐々木：はあなるほど。元々日本とは関係があったのですか。

A：うちの母親が日本の方と結婚して、そこで日本に来たのです。呼ばれたんですよ。それで、実はもう 1 人の兄、実の兄の存在は、義理の（日本人の）お父さんは知らない。知らないことになってるんです。だから本当に恥ずかしくて、ちょっと人にはね。自

慢できる家系では無いので。

日本に来る経緯

佐々木： 15 歳の時にこちらにいらしたんですか。

A：連れてこられたんですよ。それで兄だけは向こうに残って。それで義理のお父さんは、（子供は）私しかいないと思ってるんですよ。

佐々木：A さんのお母様は日本で結婚されたのですか。

A：日本で結婚したんです。私が日本に来たときは、もう弟は 2 人いたんです。

佐々木：じゃあお母さんは先に日本に来て、仕事かなにかしていたのですか。

A：そうなんです。で。4 歳から 15 歳までの間は色んな、えっと親戚、の人にこう育てられた、10 回引越ししたんですよ。10 回です

佐々木：10 回ですか

A：4 歳の時から、結局家も父親もいないし。「日本に来ないばまい」ちゅうのがあって、うちの母親が。仕方が無く、兄と、あたしをフィリピンに残して、日本に来ないといけなくなって。だから、あの、1 番記憶に残ってるのは、4 歳の時に昼寝させられて、んでそのまま、もう。もう目を覚ましたら、もう。起きたっきゃ、もう母親はいなくて。もうそこから 15 歳までの間、一緒に暮らしてないんです。

佐々木：その間、お母様は何度かあのフィリピンに戻られたりしなかったのですか。

A：来てないんですよ。

佐々木：11 年間日本、日本にいっぱなし。

A：そう。そうなんですよ。だからいない間に、その 10 ヵ所。10 回引越ししたって言うのは、それは事実ですだからもう、ちょこちょこ。結局こっちに友達出来たと思ったら、もうまた、ね。やっぱり長く居られないので、うちの母親の親戚とかにね。兄弟とかも、ね、大家族だし。

佐々木：それでお母さんが、15 歳の時に、「日本に来ないか」という風に。

A：うーん、「来ないか」というか。その理由は、父親がフィリピンに来るというのを知って。（父は）アメリカに住んでいるのですよ。家庭持っているのです。そう、ずっと。向こうも家族いるのですよ、父親は。それで、フィリピンに行って「一目でも（わたしに）会いたい」と帰ってきたのです。それで、会って。うちの母親は、それを親戚の叔母さんから聞いて「奪われる」と思って。わたしのこと奪われると思って、もう至急。日本からフィリピンに帰ってきて。（そうして日本に）連れて来られたの。もうこっちも心の準備もできてなくて。「えー、また引越ししなきゃ行けないの！」って。んで、何もわかんないとこで、連れてこられた。もうもう最悪だったのですよ。無理やり。「もう「一週間後には、日本に出発」というのを、聞かされたのです。もうだからもう、向こうの学校も辞めさせられて。急に。

日本に来てから

佐々木：日本に来てからは学校に行ったのですか。

A：中学校…1 年間だけ入ったのです。でも、もうほんとに日本語も分からないし。字も分からないし、もう何もかも全てが分からない状態で連れてこられたので。もう最悪だ

った。あはは。ほんとに最悪だったよ。うん。
佐々木：こっち来てからは。
A：泣かさる。結構、涙もろくて。
佐々木：こっち来たら、いきなり弟さんが 2 人いて。
A：そうそう。でも存在は覚えているのです。
佐々木：（年齢は）どれくらい離れていたんですか。
A：二人いて。一番上が、（今）35 歳だか。うん 35 歳だっけな、うんで下が、32 歳（涙）。
佐々木：5 つぐらい離れてるのか。
佐々木：やっぱり日本語が通じなくて、環境が。／／A：もうもう全然。全く。／／それが一番辛かった…／／A：そうですね／／ああ…当然友達も。
A：だからもう、何。振り回されてる人生、的な。うん。
佐々木：その後、名古屋にしばらくいたのですか。
A：えっと、名古屋だったのですよ。んで、うちの母親の再婚相手の人が名古屋出身の人で、そこで子供も産まれたんです。

青森に来た経緯

佐々木：いくつぐらいまで名古屋にいたんですか？
A：あたしですか？
佐々木：はい
A：えーと、何歳までだっけ。20 歳。でも子ども産んでしばらくして。覚えてないんだよね。名古屋だったもんね、だから私がこの子達を産んだのは、愛知。そうなんです。子どもは、生まれは愛知なんです。こっちじゃないんですよ。で、なんでこっちに来たかって言うと。そこもそれで、もうほんとに流されっぱなしな人生なの。で、うちの旦那、一応次男なんだけど、長男はいて。長男は東京のお嫁さんをもらって、お嫁さんはこっち（青森）には住みたくないと。それで、一応（家を）継がないといけないという事で。まあ、「それはそれでいい」って。というのも、子供たちが小学校に上がる前だったので、ちゃんとした家庭で、ちゃんとした家で子どもは育って欲しかったのよ。だから、おじいちゃんおばあちゃんがちゃんと居て、一軒家の家さ住んで。ま、田舎でもさ。それでもあたしはいいの。とりあえず家族と一緒だったらいいなって。だから、小学校さ上がる前に、こっちの保育園さ入れたんですよね。やっぱり小学校上がってから。経験してるので。そう。あちこちは、させたくないので。せっかく友達作ったのに、また転校しないといけなくなっちゃうとか。その気持ちは十分わかっているので。だからそれだけはもう。だったら最初から小学校上がる前に、「こっち（青森）に引っ越そう」って。うちの旦那から頼まれ、お願いされて。「うち帰りたいんだけど」「実家に帰りたいのだけど」って。もう迷わず「ああ良いよ」って。もう直行。来ました。だからこっちの言葉も全く分からないまま。
佐々木：最初来た時は。
A：うん、びっくりした。凄い人生でしょ。

母との仲

佐々木：旦那様とはどこで知り合ったのですか。
A：愛知で。
佐々木：愛知で。愛知で何かやってらしたのですか。
A：えっと、実は私も水商売やってて。変な水商売とかそういうのではなくって。一応、日本人が経営しているスナックとか。それは理由があって、生活していくため。なんでかというと、母親はいるんだけど、母親と仲悪いんですよ。
佐々木：そうなんですか。
A：めちゃくちゃ仲悪くって。結局小さいときから、その 15 歳までの間、一緒に暮らしてないじゃ無いですか。やっぱりいくら親子でもさ、心が通じあってないって言えば良いのかな。うん。で、結局うちの母親が問題起こして。問題というか、本人じゃないけど。実は、弟たちのお父さんとはだいぶ前に離婚していて。だからもう、一人の男性とは長く一緒にいない人で。もう、付き合っては別れて、みたいな。とにかく長く一緒に暮らせない人なんですよ。その辺もちょっと気の毒だけどね、うちの母親はね。それで、実は一人暮らししないといけなくなって、17 歳の時に。

一人暮らしの経緯

佐々木：17 歳で一人暮らしですか。
A：17 歳。それなん、えっと、うちのお母さんと弟達と、愛知にいた時にね。県営住宅さ、住んでいたんですよ。4 人暮らしで。で、日中は働いて。その時、一応中学校卒業して、夜間高校、定時制さ行ってたんですよ。日中は仕事しながら。車の部品とか作る工場で働いてたんですよ。／／佐々木：トヨタの？／／ではないんですけど、小さな工場。んで、そこで働きながら、夜は夜間高校通って、みたいな。うん。それで 17 歳位まで母親と一緒に暮らした。その期間が、また短くて、（母親から家を）追い出されたのですよ。めっちゃ追い出されて。ちょっと酷い話でさ、あの。ほんとに恥ずかしい話なんだって。実は（弟たちのお父さんと別れてから）男をまた作って、結婚とか、式は挙げて無いけど。で、うちに入れたんですよ。それが凄い嫌で。その男の人があの、すごくダメ男で。なんか県外で働いてて、薬やって捕まったんですよ。県外から来た刑事さんがいきなりうちの方さ来て、（でも）その男はいなかったんですよ。もう向こうの仕事場でつかまっちゃったので。刑事さん来て。家さ来て。うちの母親どっちかと言うと日本語上手ではないんですよ。うちのお母さんと会話しても話にならないから、私が代わりに聞かれたんですよ。「正直に答えてくださいね」って。正直に答えた（うちに住んでましたよって）。うちの母親は、「知らないよそんな男」って、否定してたんです。嘘ついてたんです。実際は、その男はもうダメな男で。うちの母親が、貢いでたみたいなんで。しかも、うちの母親も仕事してない。生活保護はもらってる。で、唯一働いてるのは、あたししか働いてないの。それであたしは、働いたお金をお母さんに全部あげてたんですよ。「あたしが働いて、（母に）あげたお金で、なんでその知らない男にご飯をたべさせなきゃいけないの！」って。本当のことを全部喋ってまった。「いや、もう何ヶ月間も家にいましたよ」って。「よーく知ってますよ」って。それでお母さんが嘘ついてたことがバレてしまって。で、もううちの母親があたしにめっちゃ激怒して。めっちゃ殴られて。もう殺されるんかなってくらい。んで、追い

出されたんですよ。刑事さん帰ったあとに。もう丸裸にされて。もう、今でも記憶に残ってるくらいで。もうほんとにさ、もうパジャマのまんまで。もうスリッパ、スリッパも履いてないまんまで。もうパスポートも VISA も。パスポートもお母さんが、お母さんに預かってもらってるので。もう財布も。1 円も、1 円も無いんですよ。そのまま追い出されたの。「二度と帰ってくるな」って。じゃあどうする！？って。それされたら。もうパジャマのままで。多分今の季節ぐらいだびょん。

家から出されてその後

A：もう部屋着だったの。だからもうスリッパも履いてないままに、もう、出て。1 人で生活してきたの。今まで、ずっと。

佐々木：どこ行ったんですか。警察とか、行ったんですか。友達のとことか。

A：あたしですか

佐々木：はい

A：義理のお父さんが、同じ県営住宅に住んでるんですよ。で、助け求めたんです。「お父さん、すみません、助けてください」って事情話して。そう、「こうこうこうで」って。でも、さすがにね、いっしょには暮らせないのでって。とにかく、これからどうするかはちょっと私もわかんないから。とにかく「スリッパちょうだいって。靴でもなんでもいいから、スリッパでもなんでもいいからちょうだい」って。そしたらその義理のお父さんが着てた服、男物の服をくれて。部屋着のままだとあれなので。電車とかに乗るために。一応知り合い、前働いてた知り合いのとこに色々お世話になって。「お父さん 1 万円だけちょうだい」って。「1 万円だけちょうだい。電車賃とか、あと交通費ないと困るから」って。「あとは何とかするから」って。「自分で」って。そこからです。あたしの人生が始まるのです。だから水商売、なんで、水商売やったか。工場の仕事も続けたんですよ。高校も真面目にって言うか、一応通ってはいたんですけど。もう疲れてるじゃないですか。日中働いて。もう寝てた。授業中疲れきって。そこから、生活しないといけない。生活費のために、学校終わったあとに急いで、夜の仕事、アルバイトしに行ってたんですよ。ダブル掛け持ちだったんですよ。日中だけでは生活できないので。学校も自分で払わなきゃ行けないので。全て。もう誰からも 1 円も支援も何も無いです。もちろんビザもパスポートも持ってない状態だったんです。しばらくもう本当に、不法滞在。そうなんです。してたんですよ。しましたよ。

佐々木：在留資格の更新もちょっとできないですね。

A：出来ないどころか、もうだってうちの母親からもう・・・。

佐々木：パスポート無いんですよね。

A：パスポートも無し。身分証明書も無し。身分証明書唯一持ってたのは、学生証。ね。なんも出来ないじゃないですか。病院も行けない。病気になった時に、薬局さ行って。風邪ひいたくらいでもう薬局さ行くしかない。

佐々木：保険証が無いですもんね。

A：だって病院行けないからね。病気にはなっちゃいけないから。1 人でアパート借りて。会社、工場の近くのめっちゃボロいマンション借りて。ほんとにいつ崩れるかくらいの。お風呂もなしなんですよ。トイレは昔の洋式では無いのよ。風呂もなし。もうほ

ぼ何もない。冷蔵庫も勿論無い。だって買えないんだもん。もちろん買い貯めとかはもう出来ないし。うん、そう。だからもうおかずとかはほんとにもう。だから子ども達にもうるさく喋るんです。特に、食べ物に関しては、粗末にしたりとかすれば。学校に行く前、ご飯を食べずに行く。それは考えられないって。「何があっても、なんでもいいから、口になんでもいいから入れろ」って。そういう苦労はもう、ほんとに大変。

仕事の経験

佐々木：アパートはどうやって借りたんですか？

A：すっごい可愛がってくれたおばさんがいて。日本人の方なんですけど。それで、その人が保証人になってくれたんです。だからアパート借りられたんですよ。事情を喋ったっきゃ、「実は追い出されて…こうこうこうで」って。まぁ簡単に言えば同情された。でもちゃんと真面目には働いてたので。若い男とかは何人かはいたけど、女の子は一人しかいなかったんですよ。それでも、汚い仕事でももう、指が油まみれさなっても、もう。でも文句言えないじゃないですか。選べないんですよ、仕事は。なんでもいいからお金。とにかく稼がねばまいんだはんで。だからなんでもやりましたよ。

A：あの、厨房の皿洗いもやりました。もう、色んなバイトしましたよ。今の、今まで。

佐々木：パスポート、在留資格は、いつ頃戻ったのですか。取り戻したというのもおかしいですけど。

A：取り戻したっていうか、結婚してからなんです。目的はそれじゃ無かったんですけど、それはあの、やっぱりね、自分のパスポートをね、貰うために誰かと結婚しなきゃいけない、とか。全くそういう目的で、うちのお父さんとは一緒になった訳ではないので。自然に。結婚する前は、いろいろ遊んできた。でも自分なりには、いつか自分の母親に、なんも恥ずかしくないように、ね。結局、追い出されてなんもないから、「結局あんたは身体売ってたんだ」って。それだけは母に言われたくなかったから。それだけはしなかった。こういう接客業とかは、普通に話して。そういう変な、触ったりとかは、全くそういうやらしいお店には行ったことないので。だからわざと日本人が経営している店とかに行きましたね。

夫との出会い

佐々木：旦那様は、名古屋でお仕事されてたんですか。

A：そうなんです。ずっと向こうで仕事してたんですよ。で、たまたまうちのお客さん。うちの旦那の友達が、あたしが働いてた店の客だったんですよ。でうちの旦那が連れてこられて。そこから。なんでかわかんないけど、お父さんめっちゃ無口な人で。

佐々木：あはは。津軽の人だ。

A：まさかこの人。「なんでこの人と結婚したんだべ！お金持ちでもないし、イケメンでもないし」。ほんとにもう、なんだか顔とかお金とか見ない人だから。あたしはね。なんか知らん間に彼は。本当に何話しても返事してくれないんですよ。もうなんていうの、何考えてるかわかんない人。なんでか知らないけど、1 人だけで通い始めるようになって。「お？あたしに気あるの」って、そう思うじゃん。そこから、この人とだったら、

別に「もう一緒になってもいいんかな」って。なんでかわかんないけど、そう思ったんだよね。パパに。ただ隣にいて、こっちはこっちばっかり喋って。向こうは「うんうん」って聞いてて。もうそれが苦痛で（笑）。「うんとか、すんとかしろよ」って。そういう出会いでした。で、あたし、卒業した。夜の世界から。もう疲れてしまって。精神面も。もうこのまんまだと、自分がダメになるかなと思って。自分の家族が欲しくなったの。友達とかはいっぱい出来たけど。お金にもさ、すごく、店で働いて。自慢じゃないけど、店のナンバーワンさなった事もあったんですよ。一時期。当時ね。めっちゃいっぱいお金も、給料も。そういう時期もあったの。もちろんその時はパスポートもなんも。お金はあるけど、友達いっぱいあるけど、もうやりたい事もいっぱい、欲しいもの買えて。でも、どっかでやっぱり満足してない部分があるのよ。何それって。やっぱり、家族なんだよ。そう。家族は大事だよ。本当に。だからこう、子どもが一人暮らしするのも心配で。そう。だからあたしにとっては家族が、やっぱり今まで家族っていうのはいたけど、向こうでね。親戚、義理の兄弟もいて、まぁおじいちゃんおばあちゃんとかもいたんだけど。こう、なんちゅうの。なんて言えばいいのかな、完璧ではないんですね。心のどこかで。なんかこれは家族とは言えない。あったかい家庭とは言えない。いつも転々と。10 回も引越ししてみな。ほんとにもう、心乱れるはんで。乱れるよ。こういう人になっちゃうよ。ほんとに。だからこう言う性格なんだって。ごめんね。

結婚

佐々木：お幾つくらいの時に結婚されたのですか。

A：21 歳ですね。はい。早いですよね。

佐々木：その頃はまだお店で働いていていたのですか。

A：結婚して、もう。辞めたんです。全て捨てた。あたしにとっても、もう。ホントにうちの旦那は、お金ない人なの。ほんとに全くお金無くって。その当時結婚した時も借金はいっぱいあったし。それも分かった上で。実はその前にも、何人かの人にアプローチされてたんですよ。家もお家も、全て持ってる人達。仕事のちょっとお偉いさんとか。そういうのも、声掛けられたけど。でも違うんだよね。でも普通、フィリピン人達は、みんな働きにこっちに来てる人達は、結局お金だはんでさ。ジジイだろうが、お金の為なら、フィリピンの家族の為には、それは目をつぶってでも、結婚はする。大体の人。だから結構覚えてる。フィリピン人の旦那さんは、かなり年が離れてる。まあそれはそれで、それぞれの人生だからさ。あたしはあたしの人生だからさ。こっちはお金無いけれども、この人とだったら。なんか感じたんだと思うんだよね。この人だったら信用できるんじゃないかなって。未だに、離婚はせず（笑）。

佐々木：離婚率は高いですよね。

A：そうなんですよ。あたしの知り合いでは、だいたい 10 年くらいが限界で。もう中学校高校上がる前には、親たちはもう、離婚してます。真面目に。これは。嫁いだからには、ね。責任っちゅうのはやっぱり。そこって重要で。人間って、自分の気持ちだけで動いていれればいいんだけど、そうはいかないじゃん。子供達に、あたしみたいな人生を歩ませたくなかったんですよね。ちゃんとお母さん、お父さんいて、おじいち

ゃんおばあちゃんいて、ひとつの家で暮らして。ワンちゃんもいて。もうこれが理想で。お金には困ってるけど、ね。お金持ちでないけど。でも、あたしの財産は自分の家族だから。ちょっとかっこいいべ。褒めて褒めて（笑）。そう。あたしの財産はあたしの家族なの。自分が作った家族なの。それは人に与えられてじゃなくて、作ってもらってじゃなくって。自分でつかんで、それをどうやって維持するか。その人だからね。うん。そう。だって何回もパパと離婚したいとか、でもそれは、どんな夫婦でもあるの。しかもおじいちゃんおばあちゃんと一緒に住んでるんだよ。姑もいますよ。大きいおばあちゃんも一緒に住んでたんですよ。99 歳で亡くなったんですよ。

夫の実家での暮し

A：一緒に暮らしてたの。それも姑とおばあちゃんの間が仲悪くて、毎日のように戦争で、私はもう板挟みになって。誰がおばあちゃんの面倒見るとか、どうのこうのって。それもあったし。姑はおばあちゃん嫌いだはんで。「おばあちゃんのオムツはやりたくない」っていって。で、おばあちゃんも、嫁の事嫌いだはんで、「やって貰いたくない」って。んで、もうそれさ頭に来て。もう、無言で。とにかく、黙ってなんも言わずに、自分から、なんも同じ血も流れてないのに。誰もやらない。誰も動かないのよ、誰一人。実の子どももやらないし。オムツ全部やったの。それでうちの姑も気づいて、あ、これはやばいなって。ちょっとまずいな、って。それに気づいて欲しかったの。あたしの目的はそこなんだって。で、そのまま死んじゃったけどね。

青森に来た当初

佐々木：青森に来たのは平成 16 年でしたね。お幾つの時いらっしゃったんですか。

A：いくつの時かな。覚えてないなあ。子どもが、3 歳だびょん。お兄ちゃんは 4 歳くらいだと思う。違う！4 歳の時くらい。んでお兄ちゃんが 5 歳くらい。

佐々木：旦那様は名古屋のお仕事をやめてすぐこちらにいらしたのですか。

A：辞めてはいなかった。出稼ぎって形をとったのさ。この子達が高校卒業するまで、ずっと出稼ぎしてたの。何故かっていうと、ここ（青森）で働けば、給料少ないんですよ。子供を育てるにお金必要だから。もう（旦那が出稼ぎに行ってても）我慢するしかないんですよ。だから半年、向こう。うちの旦那は半年向こう。半年春さなればこっちさ帰ってくる。こっち冬仕事無いので。

佐々木：で、夏場は畑とかですか。

A：畑じゃないです。土木の仕事してるんですけど。

A：だからもうそれずっと。高校卒業するまで、我慢した。

A：最初キツかったですよ。なんでかって言うと、ここなんも知らなくって。1 週間後、（旦那は名古屋に）戻んないといけないので。だからうちら 3 人だけ置いて、今の家に置いて、そうしてたの。

佐々木：いきなり（旦那さんの）お父さんお母さんと生活ですか。

A：そう。もうあの時辛かったね。キツかったね。友達もいない、車も勿論無かったんですよ。免許も無かったので。だから、免許はこっちに来てから、取ったんですよ。そう。頑張ってとったの。みんなと同じだよ、ゴールドだよ。でやっともうそろそろ落ち着くかなと思って。生活ね。生活裕福でなくてもいいから、やっぱりみんなと一緒にい

たい。いて欲しいなっていう。でも我慢してたの。本当は嫌だったの。うん。旦那だけ半年向こう、半年こっちみたいな。もうパパとバイバイする度にね、泣くんですよ。別れっていうのが大嫌いなの。別れるって。置いてかれるのがすごく嫌いで。そう。多分、そのちっちゃい頃のことがあったはんでだとおもう。未だにあるんですよ。いやもう、ずっとこっち。そう、だからずっとこっち。

佐々木：あそこの、弘前のお家で。

A：はいそうです。ずっと一緒です。で、おじいちゃんおばあちゃんも一緒にいて。

佐々木：旦那様のご兄弟は一緒には住んでない…？

A：住んでないです。東京。2 人兄弟なんですよ。兄は東京。

本家の墓

A：本家なんですよ。だから墓がいっぱいあるんですよ

佐々木：ですよね。

A：6 ヵ所あるんだよ。そう。だから、おじいちゃん、お父さんお母さん亡くなったら、引き継がないといけないのよ。だから盆さなれば、もう、6 つ全部あげないといけないんですよ。子ども達にも、もう喋ってるの。だから、「ママ達が居なくなったら頼むね」って。絶対に（お墓）守んないといけないんだよって。とにかくもうちっちゃい頃から喋ってるの。ここと、ここと、ここって。だから必ず連れていくの。つながってるの、ひとつの墓（祖先）に。いろんな親戚はどこにいるかも分からない。もう帰ってこないし、手入れしないといけないし、面倒みないといけないし、まぁ知らん顔する訳にも行けないし。「お水と、お花とお線香はちゃんとあげねばまいね」って。粗末にすればさ、ダメだよ。 うちの墓はほかの墓より、もっとホントにさ、ただの石だけ。ちゃんと名前も掘らさってとか、そういうのなんもない。なんも掘らさってないただの、こうこう石。

佐々木：その横に、徐々になんか新しい墓石ができてるんですね。

A：そうそう、だんだん今風になって、みたいな。だから責任重大なんだって。家を守っていかなきゃなって。

国籍

佐々木：ちなみに今はまだフィリピン国籍ですか。

A：フィリピンなんです。うん。フィリピンなんだけど、永住。なんで日本国籍取れなかったって言うと。出生証明書かなんかの書類が必要なんだけど、うちの母親がやってくれなかったんですよ。なんか色んな書類が必要で。お母さんは、面白くなかったんですよ。こう、わたしに家族ができたっちゅうのが。だから、なんて言えばいいのかな。どうやって説明すればいいのかな。追い出されたときに、（母に）「絶対跪いて私に助けを求める」って言われて。でもそれだけはしたくなかった。意地でも何とかしてやろうと思ったの。跪かないからねって。心の中ではね。それは口では言わなかったけどね、お母さんにはね。結局、だから頼めなかったんですよ。

佐々木：そっかそっか。会っていないんですか、それ以来。

A：この子たちが生まれた時は会わせた。一応家庭を持って子供も 2 人生まれました。それ

だけは報告した。本当は嫌だったけど。報告して一応は会いに来てくれた。何もなかったかのように。（追い出された後）最初に話した、喋ってたのを「（自分自身）よく耐えたな」って（思ってる）。ほんとに 1 円も、追い出されてから支援してもらってないの。1 円も。助けを求めたこともないし。今も。「食べ物も払えない、家賃も払えない、水道電気も払えない、どうしようどうしよう生活できない！」って頼んだこと一度もなかった。今でも、うん。頼んだことないから。助け求めたことない。それだけは守ってた。

佐々木：まだ（お母さんは）名古屋にいらっしゃるのですか。

A：いるんです。実はこないだまた倒れて。救急車で運ばれて。（弟近所に住んではいないけど）様子を見てもらってる。今病院さ入院してるんですよ。もしも何かあったときには、もうどうしても帰らなきゃいけないので。一応弟の連絡待ちみたいな。一人で暮らしてるんですよ。でももう許したの。ずっと恨んでもいいことないよ。心の中に思ってもだめだからさ。歳いってるしさ。自分も親になって、もし自分の子供に同じことされたら、気の毒だよな。誰もいないし。旦那さんもいないし。子供達ひとりも、誰もそばにいないし。孤独死したくないな。自分で思っちゃったんだよね。このままではダメって。一応呼んだんですよ。「こっちさこい」って。呼んだんですけど、寒いとこ嫌で。嫌みたい。で、同じおじいちゃんおばあちゃんもいるはんで、家に。一緒に暮らしているので。難しいんですよ。結局呼べば、生活保護の援助もらえなくなるし、面倒見なきゃいけなくなるからさ。そこなんですよ。呼べないの。でも呼びたいんですよ。傍で、倒れた時にさ。安心だろうしね。まぁそのうち、どうにかする。もう歳が歳だしさ。

兄弟について

A：旦那のお母さんたちも嫌ってるんですよ。ほんとに子供にも嫌われてる。みんなに嫌われてる。まあ、私はもう 10 年前からそういうのは捨てた。嫌うの捨てた。恨むの捨てた。なんもならないから

佐々木：姉妹とは今も連絡はとっているのですか。

A：連絡はしてます。弟たちはフィリピンにいる兄の存在は知らなかった。内緒にしてたので。この子たちはもう子供じゃないし、知る権利はあるから。まあ同じお父さんではないかもしれないけど。兄弟じゃないかもれないけど。それはもう日本にいる弟たちには喋った。もう 1 人のお兄ちゃんの存在については。

佐々木：フィリピンのお兄さんは、今マニラにいるのですか。

A：マニラにいます。

佐々木：向こうでお仕事されてるんですか。

A：複雑なんですよ。今仕事なくて。お金ちょうだいとか、生活できないとか。そういうのが。この間も電話あって。「ふざけんな」って、怒ってるわけ。気持ちは分からなくない。みんな生活のために、生きていかないといけないのに。でもそれは甘い考えなんだって。誰かが助けてくれるからその人さ頼る、すぐ頼るのは良くない。何とか自分の力でちゃんとやってから。どうしても本当に、もう水も飲めない食えない時さなったらその時は助けを求める。私はそういう人なの。すぐには助けを求めない。だからめっちゃ厳しいの。子供たちにもめっちゃ厳しいの。

佐々木：そうやって生きてきましたもんね。

A：すごい厳しいの。子どもには「一緒にしないで」って言われるの。「それママの人生だから」って、「今はもう違うんだから」って。いやその気持ちはわかる。でも「そういう人生もあるんだよ」って。だからこう、子供たちにはご飯残したりすると、めっちゃ怒るんですよ。好き嫌いとか、もうそれはありえないから。だからもう普通に子供たちが嫌いなもの、ピーマンにんじんとかも、「食えるものあるだけありがたいと思え」って。

現在のお店

佐々木：こっちのお店はいつぐらいからですか。

A：今年で 5 年

佐々木：5 年目ですか。

A：こういう仕事をしていると、いろんな出会いがあって、すごい視野が広がるんですよ。そう。やっぱり水商売やっている人とかいいイメージではない。でもそうではない、社会勉強よ。本当に。人間の社会勉強はこういう店さ集まってる。だからあたしも、一人で接客してるでしょう。いろんな客がいるわけよ。しゃべらない客、むすっとしてる客、めっちゃ侮辱してくる客。もういろんな気難しい客とか、話しやすい客とかそれ全部一人で対応しないばいけない。だから人間観察が大事なんだって。覚えるんだって。だからこの人は下ネタ苦手な人だなって、大体わかるんだって。後、政治家の話とか社会の話とか喋り出す人は、大体マニュアルタイプの人間。私にとってはね、そういう風に見えるの。 冗談通じない人とかだったら、私もその人さ合わせてそういう会話をする。下ネタ大好きの人間にはめっちゃ下ネタ喋るし。だからさ、性格がおかしくなるんだよ。頭おかしくなる。ハハハ。

以前の仕事

A：私は、仕事してたんですよ。ちゃんとした会社で。カメラのレンズ組み立てたり、拭いたり。めっちゃ難しい技術。こう見えてめっちゃ器用なんですよ。だから先生とかさ、メガネかけてる人はさ、もう拭きたくなるんですよ。拭きたくなるの。職業病が出てきて、そういえば昨日も、ここさいたお客さんいるでしょ…その人が来れば、その人は常連客で、「ちょっとメガネ貸して」って。あたしが拭いて、拭いてあげて、渡すの。みんなさ拭いてあげるの。そうすると皆「めっちゃ見える！」って。「んだべ？」って。そう。拭きたくなるの。10 年ぐらい勤めたんですよ。そこの会社さ。弘前です。弘前の。そこもいろいろあって、人間関係。ボスがあんまりにも。面接する時に自分の好みを入れるんだって。仕事できる、できない関係なく。それはいいんだけど。で、その子が入ってきました。で、やりました。何もできなくても、いいねって。何も指導しない。後は、上の人なのに従業員をいじめたりとかしてて。例えば、あの人を辞めさせたい、辞めさせたいからいじめる。私いろんな会社勤めてきたけど、会社っていうのは、日本は、「あんたやめなさいよ」って言えないじゃない。

佐々木：言えないですね。

A：その人を辞めさせるためにどうすればいい。そこで、人間の腐った考えが働くんですよ。

いじめるしかないの。仕事与えない。もうほんとに意地悪する。その人のメンタルが悪くなって、「もう辞めます」って。結局、本当はその人が被害者なのに、ね。だから自分から辞めたんですよ。投げたんですよ。最後に、「あんな人間とはもう無理だわ」って。だめなものは口に出したい。例えば会社で誰か一人いじめられたりとか、仲間外れたりとか、そういうのもう、いっぱいいて。「何なのこの人たちは」って。「なんでみんなと仲良くできないの」って。必ずグループ作って、女子とかとこう特にね。本当に面白くない。もうそういうの見れば、上の人だろうが、先輩だろうが間違った事やっていれば、もう喋っちゃうタイプ。（私は）正義感めっちゃ強い。本当に。自分で言うのも（なんだけど）、誰かいじめられたりとかすると、もうそういうのはすぐ勘づくの。すんごい嫌で嫌で。（いじめられている人）守るじゃない。ガードするじゃない。「いじめるの、楽しいの」って。喋るの。だから逆にやられるの、とばっちり来る。いいんだ私は。返せるから。でもさ、最後にダメになったんだよね。鬱になったの。鬱にかかったの。長年もう、そういうのがあって、本当に仕事中に過呼吸さなって。「もう、ああ、これは」って立っていられなくて。息もできない。「これはもう死ぬんかな」って、もう。それくらいまで。ストレスで。で、行ったっきゃ（病院）、鬱でした。でしばらく本当はこう、2 年くらいかな。外で買い物も出来ない位だったもんね。うん。だからもう家族でも子供たちでも、誰の会話も聞きたくないの。とにかく、シーンとなりたいの。もうそういう時期があって、運転もできなかったし。もちろんも、家から出るのも嫌だったし。買い物も行かなきゃいけなかったのに、旦那帰ってから一緒に行くとか、一人で買い物できない。長くいられない、みたいな。結構いろいろあった。顔面麻痺にもなったことあるし。旦那が一週間後向こう（東京）に帰ったじゃない。その時も顔面麻痺さなった。朝起きたっきゃびっくりして、うがいしてたっきゃ、水がもうブルーって（口からたれて）。

友人

A : 友達っていう友達は E くらい。選ぶんですよ。向こうにいた時に、めっちゃ裏切られて。

佐々木：お金絡んだり。

A : そう。だけじゃないし。うんもうほんとにさ、あまりそういう人間とは付き合いたくないのよ。いろんな人見てきて。「この人だったらあの、付き合ってもいいかな」とか、「この人はちょっとね」って、そういう人とは仲良くしない。いや、普通に会話はするよ。「あんたは嫌いだから、アンタとは対応したくない」とか、そういうのじゃなくて、普通には会話するけど、ここまで。それ以上は付き合わない。自分で判断する。E だったら信用出来る。

同郷とのつきあい

佐々木：じゃあもうこっち来てから、同郷のフィリピンの方との交流みたいなのはないですか。

A : ない！全くないんですよ。実はあの、ちょっと苦手なんですよ。同じ国。何でかわからないけど、あんまり付き合いたくない。同じ国の人。信用できない。信用できない。いっぱい苦労してるとさ、この人は信用出来る、出来ないの判断って、自然に出来るんだ

って。自然にできるようになった。身についたの。今まで何回も、小さい頃から、何回も引っ越してさ。この人達はお母さんがお金くれるから、お母さんが来た時だけ優しくしてくれるけど。(お母さん) いなくなれば、ご飯もまともに食べさせてくれなかったし。ほんとに、(特に) 大家族だと、色々そういう事があって。だから人間観察がめっちゃ得意なの。自慢じゃないけど。もう癖ついちゃったんですよね。結構当たるんだよ。当たるの、めっちゃ当たるの。お客さんにも結構。だからここに来るお客さんでも、若い子のお客さんでも、それぞれ悩みあって、相談され。相談しに来る子がいるのよ。「彼氏とさ」って。こう泣いて、相談求められたりとか。腹立つ時は、その人は客だけど、めっちゃ叱る。